

---

# 音の無い世界 ~オトノナイセカイ~

A-R-K

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

音の無い世界 ～オトノナイセカイ～

### 【Zコード】

Z3259F

### 【作者名】

A - R - K

### 【あらすじ】

「ウワサ」と「殺人事件」の繋がりとは?「オトノナイセカイ」が招く死の連鎖は止められるのか?様々な人物が交差していく。無数に散りばめられた謎を解き明かすことは出来だらうか?全てはある男と女から始まった……。

## 「序」 第一話・アンティーク喫茶（前書き）

いわゆるプロローグにあたる「序」は全七話で構成されています。

本編はその後から始まります。

## 「序」 第一話・アンティーク喫茶

誰もが恐怖する。その無の世界に。

誰もが恐怖する。自分のいない世界に。

日付が変わらうとするその時、サトミは帰宅した。

殺風景な部屋に大きく陣取ったクイーンサイズのベッドへ鞄を投げ捨てるように置き、そのままサトミは横たわった。鞄からヴァージニアスリムを取り出し、何も考えずに天井のシミを見つめながら燃らせる。

妙だ。

今日もいつも通りの帰宅時間だ。

仕事は定時で終わっているが、帰りにいろいろな所へ行つて時間潰して帰つてくるのが日課だ。日によってコースは違うがだいたいは決まっている。

ウインドウ・ショッピングもあることはあるが、本屋に立ち寄ることが多い。主に仕事の為のデザインや写真の物色がほとんどだ。

最後はいつも繁華街から外れた所にある古ぼけたアンティーク喫茶でクラシックを聞きながら絶えず鞄の中に持つている小説を読む。

時々、マスターの趣味なのか、はたまた気まぐれかは知らないが、ジャズが流れることもある。流れるジャズはどれも悲しげで、

悲哀に満ちた空間を作り上げる。「まるで演歌」だと苦笑いしてしまつ自分が滑稽だ。私にはどの曲も同じように聞こえるからあまり好きじやない。しかし店の雰囲気にはこのBGMが心地よい演出になつてているようにも思える。でも、それははつきり言って私にとつて曖昧なことでしかない。

私はいつも決まってジャン・コクトーを読んでいる。暇があればページをめくるのが楽しみになつていて。文字を追つことが私の唯一の救い。内容は関係ない。文体に惹かれる作家の本ならなんでもかまわないのだ。だから別に他の作家の作品でも構わない。

しかし以前、友人に勧められたサガンという作家の小説を読んだことがあつたが、あれはつまらなかつた。吐き気がするほどだ。あの女は何故あんなの進めたのだろうと思った。酷くロマンティックを氣取つていたような気がする。ロマンティック？ ラブストーリー？ 笑わせる。興味がないのですぐに読むのをやめた。以来、彼女とは連絡を取るのをやめた。

店内にはサトミとマスターだけ。

週末だというのにも関わらず客は私だけ。特に珍しいことではない。時々、経営が成り立つてゐるのか？ と疑問に思つこともあるが、それは考えるだけ野暮だ。

趣味。この店はマスターの趣味なのだろう。それ以上でもそれ以下でもない。身の上を聞くほど私は他人に依存したくない。

いつも私はカプチーノを頼む。

シナモンのほのかな香りとアンティーク風の雰囲気がいつの間にか私を虜にしていた。

店のインテリアはアンティークなアールデコ調で統一されている。カウンターの横に飾られた浮世絵風の絵画は場違いにも見えなくもないが、意外と違和感はない。アールデコ調のせいだろう。一際目立つよつた価値がありそうなものはないが、まるでこの店 자체

が一つのアールデコの絵画のようだ。マスターさえもその登場人物なのかも知れない。

店のマスターとはほとんど話さない。以前に一度話した事はあったが、彼とは会話が成り立たなかつた。アンティークの一部のように、店に溶け込んでいるかのような彼は子供の頃に読んだ絵本の中から飛び出してきたようだ。霧に包まれたような淡いイメージ。彼と話すと本当に童話の世界に入つてしまつような錯覚を覚えた。あれが本当に錯覚かどうかなんて誰にも証明できないから、ひどく曖昧だ。

ここにいると何もかも忘れてしまうののような錯覚に包まる。別に日常に嫌気がさしているわけでも無いので得には気にならない。普段なら全く気づくことのなさそうな店。目を懲らさないと分からぬかもしない。人通りの少ない道だけによけいに気づく人はいない。この店が本当に存在しているのかすら疑わしいと思つ。そんな風に考えてしまふ自分が少し可愛くも思うから滑稽だ。この店にいると普段気づかなかつた自分の一面が見えてくるような気もするから不思議だ。

初めてこの店に訪れたのはほんの一ヶ月前。今まで気づかなかつたのに……。

そして、誘われるままに入ったのだった。それ以来、毎日のようになつてゐる。お気に入りとはまた違う。そう言つたものではなく、当たり前でもない。

「今日はどうされました」

不意にマスターが口にした。

カウンターの奥、壁側一面にぎっしりとつまつたレコードを見つめ、何かを探すそぶりを見せながら、マスターはタバコに火をつけた。

マスターは年頃が五十代といったところであろうが、口ひげ

がそう見せているのよりも思えるし、少し白髪の混じった髪がそう見せているのよりも思える。はたまた音楽の趣味がそう連想させるのかもしない。だが、それだけでは分からぬ。ただ漠然とそう見えるのだ。

アールデコ調の店とはうらはらにマスターの服装は、意外とだらしない。Tシャツにデニムといったありふれた格好だが、そこには彼なりのこだわりが見られる、そのような出で立ちだ。決して不格好ではなく、むしろ紳士的に見えるのがこのマスターの不思議なところだ。

ガラムであろうか。独特の“キツイ”タバコの香りがサトミにも感じられる。ガラムのせいか、一気にアールデコ調の雰囲気が一変し、ふいにバリの空気を連想させた。

「よく分かるわね」

サトミは本を閉じ答えた。

私の時間を取らないで。そいつもなら思うところだが、確信を突かれたかの如く、サトミもまたタバコに火をつけた。

「ケルトの音楽をかけてもよろしいでしょうか？」

マスターは微笑みながら、探し物を見つけたという顔をして、返事を待たずにかけ始めた。「ええ、いいわ」と答えようとしたサトミもまた苦笑する。

フイドルが印象的な曲が流れはじめ、心地よい気分になれた。

そうか。これはケルトの音楽なのか。そうサトミは納得する。何度も耳にしたことはあったが、どこの国の音楽かまでは分からなかつた。ただなんとなく懐かしい気分にさせてくれる、そんな音楽という印象だつた。

「ケルト民族の音楽と想像されるでしょうが、実際のところは西ヨーロッパのケルト人から伝承した伝統音楽の類の総称なのです。アイルランド音楽やスコットランド音楽とも言われますが、アイデンティティーや文化に強く由来していますので、これらは全てジャンルがきちんと分かれています。商業的な要素も多いので難しいところ

ろです「

一通り話し終えたところで、「ですが、音を楽しむのに境界線はありません。難しく考えずに聞いてみて下さー」とマスターは付け加えた。

「好きだわ。こりうの」

懐かしい気分にさせてくれる音楽。でも頭に描く、その懐かしい光景は幼少や子供の頃といったものではない。人としての懐かしさ、そんな例えでいいのだろうか？ それは分からぬ。三十路を超えた悲しみからの懐古的なものではないのは確かだ。私の体が持つていてる古代からの遺伝子の記憶とでもいうのであろうか。そんな冗談のような錯覚までしてしまつほど心地よい気がする。

「お気に召したようでなによ」

そう言つとマスターはサトミにカプチーノのお代わりを出した。何も言わなくともいい、私のおじりですと、言わんとばかりの表情だった。それは自分の趣味へ理解を示してくれたサトミへの礼なのである。

「最後にいい曲を聴かせてもらひてありがとう」

サトミは言つた。それはもうこくは来ないという意味であつたことは明白であった。

「ええ、分かっています。それは一つの終わりを示しています。お気を付け下さい。私に出来ることはさせて頂きました。後はお客様、あなた様の行動次第です」

私はカプチーノの手を取つた。

マスターの言つたことの意味が分からぬ。ただ……漠然と……理解出来た、気がした。

少しノイズのようなものを感じじよつとも思えるが、それはもちらん気のせいなのだろう。

私は私でありたい。そう思えた。

そして窓は降り出した。

## 「序」 第一話・夜驚

この夜、関東一帯に襲つた豪雨はまるで一切の業わざを飲み込んでいくよな様であった。

夜空に轟とどきく音と光を楽しんでいる。

凄まじい光は見る者を虜とりにしてしまう場合がある。光をよく観察してみると様々な色で満ちているようにも見えた。

雷つて一色だけで光つていてるんじゃないんだな、と酷く感心した男は都内一角に立ち並んだ地上十五階のマンションの一室にある、一際大きな硝子窓から雨の降る夜空を楽しんでいた。しかし光よりも表情を持たない恐怖に満ちた力強い“音”に惹かれる。この世に存在する打楽器なんかは非ではないな、と苦笑する。小さな音で流れるピアノとヴァイオリンの音に耳を傾けると、人格と言つ“モノ”に依存している自分自身が不愉快になつてくれる。

男は音を必要とし、音は男を必要としない。

曖昧で憂鬱な雨の音を聞き分けるとよく分かる。雨自体に音はない。つまり音は音として存在することが出来ない。

物理的に音は音として存在するわけではなく必ず媒体となるものが存在する。それは風が空気をさる時に起こる摩擦であり、ドラムとステイックの接触により起こる摩擦であり、雨音もまた雨が何かに触れて起こる摩擦だ。

物質間に摩擦がない限り音は存在しない。音がないといふことは無でありそれは恐怖だ。

男は「音」を楽しんでいる。

楽しさついでに光と音の間を数えてみるが、そんな意味のないことをしている自分を嘲笑してみる。

そして自分の耳がすでに一番小さな音で流れていた音楽に支配

されていたことに気づいた。

ついさっきまでの自分との矛盾が男を一時的に不安にさせるが、思考はすべて停止し、自分が何をしていたかと気づくまでに幾分かの時間を必要とした。

今日あつたことを事細かく思い出そうと試みたが、そんなことをして何の意味があるのだ、と再び嘲笑してみる。

よく嘲笑う日だ。

男は鏡を見て自分を確かめる。とくに苦労もしない退屈そうな顔をした男の顔が映っているだけだ。

いつになくクリアな気分だと思つうちに浅い眠りの中に入り込んだ。音楽が遠くに聞こえるというような感覚は全く無視した突然の眠り。

音は眠り込んだ男などお構いなしに複雑に入り交じりながら鳴り続いている。

今日のクライアントには吐き気がした。全くビリうつてやがる。話しにならない。

俺は怒りを覚えながら帰宅した。外食して帰るつと想つたが、そんな気分にもなれやしない。

ヒール？ 誰だ？

玄関を見ると、ヒールがある。右足のヒールは無造作にこけてる。こんな脱ぎ方をするのは……サトミではないな。誰だ？

明かりをつけずにベッドへ行く。

月明かりが一人の女を映し出した。寝ている。というより、倒れ込んでいる。そのように見える。長く伸びた髪は激しく乱れている。

「お前はいつもそうだな。風邪ひくぞ。着替えるよ」

俺はそう言つたが……俺はこの女を知らない。

今日は冷える。毛布を被せてやろうと、俺は毛布を手にとつた。

ぬるつとした感触。なんだこれは。暗くて見えない。  
とにかくかけてやろう。

「おかえり……」

女は言った。起きたようだ。やはり知らない声だが、知つてる  
よつな氣もある。

「着替えるよ  
「よ」

俺は女の隣に添い寝するよつに横たわつた。女の髪をかき上げ  
てやる。

「今日も遅いのね。私さあ……」

女は言つ。その顔はやはり知らない。でも懐かしい氣がする。

話し途中で俺は女の口を口で塞いだ。舌と舌が絡み合つ。この  
感覺……知つていて。

初老の男が窓際に立つてゐる。こつちを見てゐる。月明かりに  
照らされてゐるせいで、その表情までは読み取れない。

誰だ？ まあいい。誰であろうと今の俺には興味がない。

俺はその初老の男を見ながらもキスを続ける。俺の右手が女の  
胸に這わしたところで、初老は言つた。

「今日と言つ日は一度しか訪れない。そう思つていませんか？ 確  
かにそうです。ですが……可能性。その可能性を示すのはあなたの  
行動次第。またお会いしましょう」

氣づけば、場面は変わつてゐる。どうやら俺の部屋ではなく女  
の部屋のようだ。しかしキスは続いている。

突然女は唇を離し、俺の頬をなめ回した。やめろよ、と言おう  
としたその時、激痛が走つた。激痛と呼べるようなものではない。  
熱い、激しく熱い。痛みで頭が麻痺するかのようだ。これはまずい。  
思考が停止する。何がなんだか分からない。頭が痛い……。頬？  
頬が痛い？ 熱い？

「ぐあつ……」

声にならない声を出す。月明かりに照らされた鏡に俺が写つた。  
俺は血塗ちまみれだ。頬が黒い。どす黒く見える。穴？ そつか……その

時分かつた。女が俺の頬を食い千切つたのだ。

俺はその様子を天井から見つめている。俺は俺を見ている。激痛が俺を襲うが冷静に天井から俺を見ている。上視点のカメラワーク。そのような感じだ。

女は血塗れの口のまま「頬を食われた俺」を薄気味の悪い微笑みを浮かべながら見てている。「天井から見る俺」はそれをまるで映画を見るように見てている。

女は俺の頬と思われる肉片をたらりと口から出し、まるでよだれの如く、どす黒くなつた血を垂らしている。不思議と俺は恐怖しない。痛みも気づけば無くなつている。だが、「もう一人の俺」は苦悶の表情のままだ。

気づけば俺はテレビを見ている。もう、やつをやめていた「そこ」をテレビから見ていく。

『あ・だから・・・・・たしは・・・もう・・・・・ど・・・・・で  
も・・・・いいのぉ・・・お・・・・トを・・・・』

突然テレビから登場人物が消えた。女の部屋も気づけば、白一色の部屋が映し出されていいだけ。何かの施設か？

！」

画面に……写っている……俺……そして女……。

テレビに反射して写っている俺と女。女は両手に何か持つてい  
る。アーヴィング。

そう思つた瞬間、

「オトノナイセカイへようこそ」

「それが最後の「音」となつた。」  
そう聞こえた。確かに、しかし言葉で言い表せない激痛と共に

女は俺の両耳にアイスピックを刺したのだ。

一時間ほど眠りについていた男は突然目を覚まし、自分が何処にいるのか分からなくなり、何かを呟いた。

何を言っているのか本人も分かつていなければだ。しばらくの放心状態。

男は思い出したかのように、タバコ（銘柄は確認出来ない）を取り出し、慌てて火をつけた。深く吸い込む。しかし寝起きのせいか、口の中がどうも気持ち悪い。タバコもまずい。買い置きしてあつたペットボトルのミネラルウォーターを一気に飲み干すことでやつと落ち着きを取り戻せた。なぜか耳がじんじんする……。

部屋が少し荒れている気がする。男は思い返してみる。しかしいくら思い出したところで、荒れるような原因は見あたらない。何かを物色した、そういう荒れ方ではない。男は周囲から思われる性格とは裏腹に几帳面きぢめんだ。部屋は常に綺麗に整頓され掃除もされている。なにより現状のような部屋の乱れは男自身が許せない。

さっきまでは確かに片づいていた。部屋の中で荒れている箇所は灰皿くらいだ。だからといって誰かが侵入したとも思えない。

男は気づいた。これは誰でもない。俺のせいだと。そうか「夜やき驚よ」か、そう思った。

この男には妙な持病がある。子供の頃は幾度と無くあり、親をよく心配させたものだ。

「夜驚」とは、睡眠中、著しい発汗をともなり、突然に大声で叫びだしたり、暴れるなどのパニック状態のこという。主に子供に多いものだが、中には大人でもなるものがいる。

この男の場合、子供の頃、高熱が出るときに多く症状が出た。しかし中学に入る頃になるといつの間にか「夜驚」はなくなつていった。しかしここ数年、頻繁ではないが、何度かあつたようだ。

ようやく焦点が定まってきた。目の前には壁に掛けたアンディ・ウォーホールのポップアートのバナナが見えた。

そうだな、気分を落ち着かせよう。もうすでに停止していたC

DプレーヤーからCDを取り出し、違うCDに入れ替えた。ヴェルヴェット・アンダーグラウンドが低いヴォリュームで流れ始める。

コンコン……

ドアをノックする音が聞こえた。しかしその音は男を破壊する。男の脳裏に「破壊、破壊」と0と1の一進数のように、繰り返し、繰り返し、嫌な気分が吐き気のように恐ろしいスピードで頭の中を駆けめぐつた。苦しい。胸が絞めつけられるようで、気持ち悪い。全てを断ち切られたような、自分の元を絶たれたような気がした。

男はただ空中に焦点も定まらないまま、目を開けていた。頭はすでに麻痺している。眠気など何も感じなくなる程に。それは丁度、全力疾走しているときの状態、ランナーズ・ハイのようなものに何故か似ていた。

部屋の風景もいつもの何かと違うように、とてつもなく広く感じられる。感覚が鈍っている。頭も何かぼんやりとしていて、少しだけだが、脳が圧迫されているようなむず<sup>がね</sup>痒い感覚もある。狂氣と殺意はいつも奥底で、まだかまだかと人を嘲笑うかのように待っている。

男はコカインとかヘロインなどの麻薬の常用者のような血走つて濁つた赤い目を鏡で見つめる。

目をこすつて目のかゆみから逃れようとするが、かえつて目は赤く充血する。目のかゆみは人を苛立たせる。しかしそれは現実として受け止めさせる作用もある。

男は目薬を差し、しばらくの間何も考えずに目を閉じた。再びノックの音がするまで男は何も考えずにいたが、狂氣と殺意が薄れていくのが分かると、静かに心を落ち着かせドアノックを解いた。

## 「序」 第二話・ある一つの決意

妙だ。と感じるのは何故だろ？。

サトミはタバコを少し燻くもらせるだけで、すぐに消した。ファイルターについた口紅に一瞬目をやる。

シャワー浴びなきゃ……。

突然降り出した大雨でサトミはかなり濡れていた。酷く疲れたせいか、何も考えずにベッドに横たわつたものだから、ベッドのシーツも中途半端に濡れている。輪ジミが出来そうだ。しかしながら行動に起こせない。とにかく服を脱がないと風邪を引く。

サトミは濡れた服を脱ぎ、ベッドの側に置いてあるワンドリー ボックスに投げ入れた。

下着姿のままもう一度タバコに火をつける。帰宅してからもうすでに一時間近くも経過している。

明日はケルト音楽でも探しに行こうかな、と再び天井を見上げながら思った。今は何も考えたくない。そんな気分の今にこそあの音楽が私には必要かもね、とサトミは苦笑する。

天井には何故か薄黒いシミがある。そのシミはちょうど三十分ほどの大さだ。入居した当時からあるが、その頃から比べると少し大きくなつてゐる様にも見える。何度かポスターが何かで隠そうとも思ったが、面倒だし、なによりポスターを貼るという行為が自分自身許せない。

ちょうどベッドの頭の真上にシミが位置しているので、いつもサトミは寝る前にそのシミを見ながら就寝する。時には人の顔に見えたり、時には雲のようなものにも見える。それはもちろん物理的なものではない。その時の心境によつて見えるものが変わつてくるのだ。

なんのシミなのだろう。未だに分からぬ。真っ白な天井だから確かに気になる存在であることには違ひない。

シミを見つめていると、訳も分からず性欲に支配されることが多い。でも今はそんな気分にはならない。いつしか私の中では私に無くてはならない存在となっていた。私はこのシミとともにいる。

電話が鳴った。

時計を見るとすでに日付が変わっている。週末のこんな時間に電話をかけてくるのはあの男ぐらいだろう。彼はなぜか携帯に電話してこない。

サトミはタバコを消し、さらにもう一本に火を付けてから深く吸い込み、天井に向かって煙を吐いた。そして少しの間をおいて電話にでた。

「もしもし」

電話相手はマサトだった。いつものように電話はかかってくる。普段はもっと早い時間だ。今日は週末のせいか、いつもより遅い。

彼とは特に会話をしない。習慣のように義務的に会話をしているだけ。私はこれほど無意味な時間はないと思つていて。でも不思議なことにマサトの声を聞いているだけで、体の奥が熱くなつてくる。私の体は間違いなく欲しがつているのだ。

今田も退屈な話しだけで電話を切ると、急いでシャワーを浴びることにした。風邪を引きそうだ。

マサトと出合ったのは去年の秋、だつたとこじぐらいしか思いつかない。どうやって知り合つたのか酷く曖昧だ。本当に去年だつたのか？ 秋だつたのか？ それすら分からなくなつてくることも多いのは事実だ。

出会いにそれほど重要性を求めていいるわけでもなく、彼に何を求めているわけでもない。

私がいることを誰かに認めてもらいたいのだろうか？ 自分の体を傷つけて快樂におぼれるのも寂しさからだろうか？

だけど一度も寂しいと感じたことはない。でもそれは気のせいかも知れない。

だが、そこには何もなく殺意にも似た感情が潜んでいることを私は知っている。どこまでも追いかけてくる。頭の中を駆けめぐる。いつか私と交わり、変わるものまで私を苦しめるはずだ。

時に強く。時に弱く。人の精神状態は不安定が当たり前だ。

だからといって弱いままではどうしようもない。何故だろう…

…。酷く感覚が鈍っている。このままではいけない。

分かっている。わかっている……。言い訳が必要なのだろうか身の安全ばかりを気にする？ 安住の地がほしいだけだろうか？ 体が、頭が安らぎを求めているだけだろうか？

時々、すべてを捨ててしまいたくなる時がある。

時々、目の前にいる人たちを殺してしまいたくなるときがある。時々、目の前にあるものをすべて破壊したくなるときがある。

そんな衝動に駆られるのは誰にでもあることだ。心の葛藤と言つてしまえばそれだけだが……。そんなに甘くない。普通は実行することはない。しかし、実行する者は異常者とみなされる。

ではいったいどんな差があるのでだろう？ モラル？ 自制心？ 恐怖？ 関係ない。結果のみだ。ある者は恐怖から逃れるために

…。

結局、逃げているのだろうか？ 何から？ 自分から？ 世間から？ 結局、マサトじゃなくてもいいのかも知れない。

誰だつていいのかも。ほかの男でも女でも。

私の右の乳首のピアッシングだつて一つ間違えればただの物質。私は逃げようとしているのだろうか……。

サトニーの部屋は都心から少し離れた郊外にある十階建てのマン

ションの六階にある。外装も内装も綺麗でまだ築一年だ。その割には意外と安い家賃となっている。

上京したときにはかなりの数の不動産を廻ったが「ここを見つけた時、居場所が見つかった、などではなく「ここにしなければと駄目だ」と直感的に、それはある種の衝撃を感じたほどだつた。

何よりサトミが「ここを選んだのもベランダから見える景色」が郊外という事もあり綺麗だったからだ。東京でもまだこんなに美しい景色があるのだろうか？

とも思つたがそれは違うと思つたのもまた事実。この景色が作り物なのに、そんな感想を持つこと自体、なんの意味を持たないのかもしれない。

事業で出来た街。だから何？ 私には関係ない。通勤には少し不便だがサトミにとつてそれは何の問題もなかつた。

そのベランダからずつと外の景色を煙草を吹かしながら見ていると、ふとした瞬間、飛び降りたいという衝動に駆られる時も、多くの星が散らばる夜空を見上げても、私は生きているんだなど実感する自分を笑いたくなる。

何に浸る必要があるのだろうか？ サトミはただ、見ているだけなのだ……。

私はなぜあのアンティーク喫茶へ行かないと決めたのだろう。理由は自分でもよく分からない。そもそもあのアンティーク喫茶が実在するのかすら、すでにあやふやだ。

マスターが聞かせてくれたケルト音楽を思い出してみる。優しいケルトの音楽が私を包んでくれるかのよ。

そう言えばマスターが何か言つていた。でも思い出せない。

あの空間はまるで夢のような錯覚を思わせるどころか、まるで夢そのもののようにも思える。

……行動。

そうだ、私はこのままではいけない。

私は私であるために、マサトと向き合わなくてはならない。

サトノは再び着替え、簡単に化粧をすると、足早にマサトの家に向かうことにした。

## 「序」 第四話・ホワイトノイズ

はつと気づくと私はベッドに横たわっていた。

何も思い出せない。

夢？ 私は夢を見ていたの？

まどろみが残っている。良い夢だったのかしら？ なんだか懐かしくて切ない夢だったようにも思える。

今、何時かしら？

壁時計を寝ぼけ眼で見ると、時計の針は八時を示していた。朝

？ 夜？ それすらよく分からない。曜日感覚もない。

部屋にカー・テンの隙間から一筋の光が漏れている。

いけない。遅刻する。

私は急いで支度をすると、仕事場へと向かった。

いくつかの電車を乗り換え、会社へ出向く。今日は美容師の受賞者用の小冊子を仕上げなければならない。

今日はほとんどの社員は来てないようだ。オフィスの一番目立つところに設置してある伝言板を見ると、今日の出席はどひやら私だけのようだ。

自分の机に向かうと早速Macを立ち上げる。そうだ、見積書の作成もあつた。メールのチェックも兼ねてWindowsのパソコンも立ち上げる。

私は基本的にデザインはMac、文書作成やメール、インターネットはWindowsと使い分けている。

モニター一台の間をしばらくぼーっと見つめる。一瞬ノイズのようなものが目の前を走った気がするが、まあそれは気のせいだろう。

Mac上でiPhotoDesign（主にDTP用のデザインツール）を立ち上げる。

オフィス内には私だけ……。ふと私の影の部分が姿を現そうと

する。淫魔……。彼女は私をたぶらかす。私の手は自然とスカートの中に入っていく。下着の上から指で熱くなってきた箇所をなぞる。下半身がどんどん熱くなっていくのが分かる。

頭がぼーっとしてくる。吐息混じりに快楽に委ねようとするもう一人の私の存在が大きくなってくる。

しかし突然、携帯が鳴った。メールだ。

我に戻った私は少し残念な気持ちを押し殺し、メールをチェックする。なんてことはない、いわゆる「出会い系」のメールだ。つまらない。

拍子抜けた私は仕事に取りかかることにした。先に見積書から済ませてしまおう。

結局、夕方頃に仕事を全て終わることが出来た。小冊子のデータインも明日クライアントに渡せる。これで安心だ。

私はいつも通り今日も定時で帰ることにした。食事……どうしよう。

夕日が街を鮮やかなオレンジ色に染めている。いつもならウインドウショッピングをするのだが、今日は早く家路につきたい気持ちでいっぱいだった。特に予定があるわけでもない。

駅を目指して歩く。オフィス街を離れ、繁華街を離れ……。

ふと、目を留めると、古めかしい喫茶店があつた。アンティーク風とでもいうのだろうか。何故か私は足を止め、喫茶店を見つめた。

入つてみよう。何故そう思ったのか、私にも分からぬ。食事を取ることは出来そうにもない雰囲気だ。

店内に入ると、そこは一風変わったアンティーク風の店だった。アジア雑貨、インド雑貨、日本雑貨、よく分からぬが中国のものやヨーロッパ風? のようなものもある。統一感が全くない。しかし絶妙なバランスを取っているような店内だった。様々な色が入り交じった空間。普通ならうるさく感じるような色相感だが、その配

色もまた完璧なもののようにも思えた。

雑貨に隠れて少し判別しにくいが、カウンターのようなものが  
あつた。思わず私は興味深く店内に見入ってしまった。

するとカウンターの奥から声が聞こえた。

「いらっしゃいませ」

長い髪を結った白髪の初老の男がいった。この人がこの店のマ  
スターなんだなと直感した。

ジジジッ……。

ノイズのようなものが私の視界に一瞬入ってきたような気がし  
た。疲れているのだろうか。

私はカウンターに備えられた椅子に腰掛けた。

その初老の男の格好は変わっていた。モンゴルの民族衣装のよ  
うなものを着ている。一風変わったように見えるがこの空間では、  
まるでこの空間の雑貨の一部であるかのようにも見える。

初老の男は何も言わず、無表情のまま私にカプチーノを出して  
きた。

「私、まだ何も注文していないわよ。ま、確かにカプチーノを注文し  
ようとは考えたけど」

私は驚きを隠せなかつた。私はカフェや喫茶店では必ずカプチ  
ーノを注文するのだ。しかも私はこの店に入つて数分も経つていな  
い。なぜこのマスターは私にカプチーノを出してきたのだろう。

私はタバコを取り出し、火をつけた。そしてカプチーノに口を  
つけた。その味に私は驚いた。なんと私の好みの仕上がりなのだ。  
それは温度に至るまで私の好みを象徴するかのようなものだつた。  
「一つお聞かせしましょう。貴女は方舟（はうふね）（箱船）というものをご存  
じか？」

マスターは突然言つてきた。驚いたものの私は答えた。

「ええ、少しなら。ノアの方舟よね？ 詳しくは知らないわ」

「そうです。では、その方舟についてお話ししましょう」

マスターもタバコに火をつけた。それはガラムという強いタバ

「だつた。独特の匂いがきつい。でも私は決して嫌いではなかつた。その匂いは私の好きなシナモンを連想させるから。

そしてマスターはゆつくりと語り出した。いつも私ならこんなマスターの茶番には付き合わない。でも、この話しさは聞かなくてはいけない、そう思える何か不思議な予感があつた。

「ヤハウェ（神）は増え始めた人々の悪行を見かね、洪水で滅ぼすと『神に従う無垢な人』ノアに告げ、方舟の建設を命じたのです。ノアとその一家、そして神に従う人や動植物をその洪水から救うためですね。神の慈悲といえるでしょう。ノアと家族八人は一所懸命働き、ノアは伝道して、大洪水が来ることを前もつて人々に知らせましたが、悲しいことに耳を傾ける者はいなかつたのです。

ノアは方舟を完成させると、家族とその妻子、すべての動物のつがいを方舟に乗せました。洪水は四十日四十夜続き、地上に生きていたものを滅ぼしつきました。洪水は百五十日の間、地上で勢いを失わなかつたのです。その後、方舟はアララフト山の上にとまつたそうです。

四十日あとノアは鳩かづかを放ちましたが、とまるところがなく帰つてきました。七日後鳩を放すと、鳩はオリーブの葉をくわえて船に戻つてきました。さらに七日経つて鳩を放すと、鳩はもう戻つてこなかつたそうです。

そのことからノアは水がひいたことを知り、家族と動物たちと共に方舟を出ました。そこで祭壇を築いていけにえを神にささげました。

神はこれに対し、ノアとその息子たちを祝福し、ノアとその息子たちと後の子孫たち、そして地上の全ての肉なるものに対し、全生物を全滅させる大洪水は決して起こさないことを契約しました。そしてその契約の印として、空に虹をかけたそうです」

マスターは短くなつた煙草を消し、新たに煙草を取り出すとマ

ツチで火を付けた。顎鬚あごひげを触るのがクセなのだろうか。しきりに触つていてる。

ノアの方舟の話はなんとなく知っていただけで、ここまで詳しくは知らなかつた。話としては興味があるけど、だからと言つてなんなのだろう? この話しさを聞いていると、神は本当に神のかと疑いたくなつてくる。神の名を借りた悪魔なのでは? と。そもそもなぜマスターはこの話私にするのか? 初対面の相手にいきなりこんな話しさをするなんてどうかしてる。では、私は何故黙つて聞いているのだろう。

そして再びマスターは話し始めた。

「以上が大まかな『ノアの方舟』の話しさです。これは『旧約聖書』の『創世記（六章 九章）』に記されているものです。

さて、この方舟ですが、旧約聖書が書かれたのは原語のヘブル語が使われていますが、英訳聖書では『ARK』とされています。

ARKとはもちろん『ノアの方舟』を示す言葉ですが、『契約の箱』としても用いられます。それは神との契約書である十戒じっかいが刻まれた石板を収めた聖櫃せいひつことなのです。十戒はプロテスタンントとカトリックでは少し違います。

こんな言い方をすると語弊ごへいがあるかと思いますが、極端に言えば、大事な物を納めておく箱の事ですね

ジジジッ

ノイズが走る。マスターの顔が一瞬ブレたような気がした。

そして尚もマスターは話し続ける。

「その聖櫃、つまりARKですが、これの表面には六芒星ろくぼうせい（ダビデの星）が刻まれています。

ARKは聖なるものですが、選ばれた聖者以外の者が開けると一瞬にして大量の人を死に至らしめる恐るべき破壊力を秘めたものでもあつたようです。

またARKという言葉にはいろいろ諸説があります。古代では女性器の隠語としても用いられたという話もあります。聖櫃に刻ま

れた六芒星ですが、 は男性器、 を女性器を表したものだと云われています。

では、先ほどお話したノアの話でお話しましたが、方舟にはすべての動物のつがいを入れました。このつがいを精子と卵子に例えると……。

そうです。方舟を子宫と解釈することができるのです。仏教でいう胎蔵曼荼羅たいぞうまんたらですが、全体が大日如来の胎内を意味しています。これと同じことが言えるのです。

曼荼羅は宇宙を象徴しています。つまり子宮は小宇宙とも言い換えることが出来るのかも知れません」

マスターは一通り話した、後は自分で考え、と言わんばかりの表情でこちらを見ている。

私は……何も考えられなかつた。

ジジジッ

ノイズが再び訪れた。白い。それは白いノイズだ。画面が揺れるような感覚。頭がぼーっとしていく。なんだか、少しすつ酔くなつてゐるよつに思える。

分からぬ。今のこの時は夢なの？ そうだとすればこの不思議な店もマスターも夢の住人？ ジヤ、私は寝てるの？

辛うじてカプチーノのほのかな苦さが私を現実に戻してくれる。私は頭を押さえつつ、タバコに火をつけた。

「どうやら……無理のようですね。やはり貴女は選択肢を間違えられたようだ」

マスターが何か言つてゐるが、私には、もう、何も、聞こえない……聞こえている、気も、する、が、理、解、できな、い……私は……だ、れ、な、の。

白いノイズが私の視界を全て奪つていった。意識は辛うじてまだある。

どこからともなく声が聞こえる。女性のよつた男性のよつた、よく分からぬが聞こえる。

「オトノナイセカイへよつ」  
「アーヴィング」

## モーゼの十戒（モーセの十戒）【Wikipediaより引用】

### プロテスタント

- 一、主が唯一の神であること
- 二、偶像を作つてはならないこと（偶像崇拜の禁止）
- 三、神の名を徒らに取り上げてはならないこと
- 四、安息日を守ること
- 五、父母を敬うこと
- 六、殺人をしてはいけないこと
- 七、姦淫かんいんをしてはいけないこと
- 八、盗んではいけないこと
- 九、偽証してはいけないこと
- 十、隣人の家をむさぼってはいけないこと

### カトリック

- 一、わたしのほかに神があつてはならない。
- 二、あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。
- 三、主の名を心にとどめ、これを聖とせよ。
- 四、あなたの父母を敬え。
- 五、殺してはならない。
- 六、姦淫してはならない。
- 七、盗んではならない。
- 八、隣人に関して偽証してはならない。
- 九、隣人の妻を欲してはならない。

十、隣人の財産を欲してはならない。

## 「序」 第五話・音の無い世界が奏でるのは?

誰もが恐怖する。その無の世界に。

誰もが恐怖する。自分のいない世界に。

誰もが恐怖する。自分が忘れられた世界を。

その女は少し濡れた雨を拭い、バレッタでとめた長い髪をとき、ルイ・ヴィトンのバッグを無造作にベッドにほおり投げ、一際大きく存在感のある六十インチのテレビとブルーレイレコーダーと7.1chサラウンドセットとCDプレーヤーとベッドと小さなテーブルと本棚しかないフローリングの部屋を舐めるように見渡し、あなたの部屋つていつも退屈ね、と言わないばかりの目で微笑んだ。

男もそれを認めるように笑い、軽い口づけを交わした。その軽い口づけだけで男は完全に平常心を取り戻したが、そんな単純な自分が認めるように女を見つめた。

そしてCDをとめようとするが女は、そのまでいい、と制し、上着を脱ぎベッドの上に転がつたままのバッグからヴァージニアスリムを取り出し火をつけた。

メンソールの煙を吐き出した女は男の全身を目だけで一通り見渡すと、嘲笑うでもなくエロティックでもない奇妙な微笑みを見せ、つけたばかりのヴァージニアスリムを灰皿に消した。

「ねえ……」

サトミは甘えるような誘惑でもかけるかのような態度を取りながら俺の横にすり寄ってきた。

俺はまだかゆみの取れない目を擦りながらサトミの髪をそつと撫でてやつた。

今日のサトミはよく笑うな、ま、俺もそつだがな……。

「コ一クある？ 無ければこの際ハツパでもいいわ」

両方あるけど俺はいい。

俺は本棚に無造作に置いてあつた小さなビニール袋に入つたコ

カインをサトミにやつた。

気分程度にやめておけ。

俺がそう言つとサトミは舌で唇を濡らし、艶がかつたその唇を、ワカツテルワヨと動かして見せた。

「コカインの袋から白くて綺麗な粉を出し小さな机の上でサトミはクレジットカードでさらに細かく碎き始めた。その白い粉を丁寧に一本の筋にすると、財布からとりだした千円札を巻いて簡にした。俺は思わずおかしくて笑いをこらえた。おいおい千円札はないだろう？

サトミは目を瞑つたまま微笑み、ゆっくりとコカインを華から吸つた。目を瞑つたままサトミは、ああ……と声を漏らしている。少し体がくねり始めている。その淫靡な動きを俺はじつと見つめる。徐々にコカインが効き始めている。人が薬をやつしているところを見るのは虫唾むしゃずが走る。

ああ、気分が悪くなる。

サトミの口から少し濁つた白い涎よだれが出てきた。俺は今日はそれ以上やるなと制しコカインを取り上げた。

まるでタランティーノの映画のようだ。これが映画ならどれだけ、俺は救われるのか……。

コカインを取り上げた時に見せたサトミの表情は、今までに見

た表情のどれにも似ても似つかなく、俺が今までに見てきたどの人の表情にも属していなかつた。

全て悟つたとか、これ以上失う物がないとか、最高の快楽であるとかそう言つたモノでもなく、それらを合わせた表情でもない、まったく表情がないというような表情をしていた。決してコカインのせいではない。俺は麻薬のせいで変わつた人の様々な表情を見てきたから良く分かる。

明らかに異質で奇妙だ。まあ、バッドトリップには違いないかも知れないがな。

俺はそんな顔をしたサトミを時間を忘れて眺めた。

大した時間ではない。小説を一ページ読むくらいの時間だ。

何もない表情なのに酷くエロティズムを感じさせる。俺は迂闊にも勃起しそうな感覚に見回れ、体が小刻みにブルブルと震えそうになつた。それはオルガスムスを連想させ虚脱感をも連想させた。恥を感じ股間を押さえそれに耐えた。

人格。

ふと、頭に横切つた。サトミに人格が感じられない。人を形成させる為の格。それが見えてこないのだ。だから……なのだろうか、その顔はマネキンのようにも見える。あの微笑みが美しいサトミは一時的にしても何処へ行つたのだろう。

俺はサトミの肩に手をやろうとした。

「夢を見たのよ……」

サトミはにこりと笑つて言つた。

コメヲミタノヨ……。

女はそう言つた。

メランコリックな表情で男を見つめる。あの微笑みは何だつたのだろう。恥を感じ始めている男は顔が赤く染まっていく。見つめられているとさらに大きな恥が包み込む。

そんな男から目を放した女はヴァージニアスリムをくわえ、火をつけ煙を深々と吸い込んだ。

「私がシステムに属しているのよ」

女は煙を吐き出し独り言のように言った。

男はモノのような存在で部屋の一部、風景に溶け込んでいった。俺はモノだ。そして女は唯一のモノではなかつた。

「誰でもシステムに属しているし、システムに頼りきつて安心しているわよね。セックスだつて儀式みたいなものだし、ほら、私たちがこうして逢つているのもシステムと何ら変わりないわ。そういう具体性のあるシステムじゃなくて、無いのよ……その具体性が……」

女はヴァージニアスリムを灰皿に置いた。男は女が何を言おつとしているのか全く分からずにモノとして聞いていた。

「私ね、知ってる？ いつもアンティークショップに行くのよ。そこでね、本を読むの。なんてことない本。そうね、主に小説かしら。カプチーノが好き。ん……いや、そんなことはどうでもいいのよ。本当の私なんて、どこにも無い、そう感じじる現実から逃れたいだけなのかも知れない。あのアンティークショップが唯一の要？ フフ、なんかバカ、みたい。まあ、いいわ」

遠くで誰かが何かを話しているような感覚……。

「システム」と声に出さずに呴いてみるが、モノとして今ここにいる俺にとつてのシステムとは何の意味も持つてないし、すでにシステムとの関係を遮断しようとしているのは全くの人格を無視している事と何の変わりもない、と男は思う。

そして不意に「人格」と言つ言葉が再び脳裏に現れた。人格とはなんだ、今のサトミには人格を感じることは出来るが俺自身に感じることが出来ない、全てが反転しているのか？ 逆流しているのか？ ならばこう考えてるこれは人格じゃないのか？ そう命令されていいるのか？

このオソナは誰だ？ サトミ？ それは誰だ？ 俺のオソナ？

サトミ？ 懐かしい響き？

違う。

今の俺に出来る事と言えば脱力感に耐えモノとして聞くことだけだ。

男は少しの動作もすることなく女の反応を待つて いる。

「具体性のないシステムの中に私はほおり込まれ途方に暮れているの、分かる？ フフ、具体性が無いんだから分かるはず無いわよね。すべてが私を無視しようとして、まるで……そう、まるで<sup>もや</sup>闇の中で、最早死語となつた幻想のようなモノ？ に取り込まれそうになるのよ……。そこには私に無かつたモノ、コンプレックスがあつて、私は私を認めようとしないのよ。

コンプレックスなんて無いに超したことないわよね？ というよりも私はコンプレックスなんて知らなかつたし、無いものだと思つていたわけ……なの。勘違いしないでね、別に自分に自信があるつて言うような意味じやないから。

だから、そう思つてたわけ。言葉だけがつてね？ そのコンプレックスが私の人格を……そう、人格よね。それが私の根底で<sup>もじゆ</sup>蠢いて形成していたのよ。

私はコンプレックスの中で生きていたのよ。でも、それが一体なんなかからなかつたし恐怖だつた。

真つ黒で大きな染みの一部になつて世界の終わりを感じるような恐怖だつたわ。今まで感じた恐怖のどれでもなかつたから曖昧なんだけれどね。

吐き気に似た感覚もあつたわね、セックスの途中で相手があまりにもへタで腹が立つていつまで経つてもイクことが出来ないような腹立しさもあつたような気がするわ。<sup>がくせん</sup>愕然ともしたわね。

でも結局私の中にあつた具体性のないシステムに縛られたコンプレックスの原因は分からなかつた

女はすでにフィルターまで燃えたヴァージニアスリムを消し、新たにもう一本取り出して火をつけ吸い出した。

男はモノを考える。何故自分がモノであるのか、その必要性とは。恥とは。

この女は何をべらべらと話しているんだ。今、俺はモノだ。

「分からぬままじや駄目なのよ。私が誰かなんていいの。ただ理解したいのよ」

情報を得なければならぬ。モノでは駄目だ。依存の根底を見つけだし、破壊だ。

「外側でダンスステップを踏んでいるよ。乾いた空氣と濺んだ空氣の中で優しく踊っているの。でもね、でもね……だから、その……楽しんでいるわけじゃなくて、相手もいないし、鏡、そんな感じなの。そして誰でもない私に、私が私を売り渡したのよ」

女はそこまで言つと嘔吐おうとに苦しみだした。あまりいい物じやなかつたからな、男にとつては自分がモノであると言つ事実の方が苦痛だ。

恐怖？ 何を言つ。今、俺を支えているのは目のかゆみだけだ。『氣分が悪いわ……』

女の顔色が青ざめできている。しかし再び口は開いた。何かが男の中で弾けようとするとする。まるで柘榴あくびのようだ。

「利己的じゃないわ。私は怖いのよ。売り渡したこと後悔しているの。売り渡したくなかったのに……。でも、私は鏡を見るようにダンスステップを踏んで具体化を計るうとしているのよ」

依存するな、依存するんじやない。  
依存するな、依存するんじやない。  
依存するな、依存するんじやない。

「やうやつて、鏡を見るよつこ……砂漠を彷彿つよつこ……自分と向き合つて分かつたことが一つだけあるのよ」

そう言つて女は男を見つめた。

その柔らかく滑らかで暖かな視線は青ざめた表情と共に男を恐怖する。この女、救いを求めている。男はその時初めて何故自分がモノであつたかを理解した。

危険だ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「あなたのことよ……」

そう言つと女は男にキスをした。一人の舌はお互いの粘膜をすべて取り除くかのように激しく絡み合つた。しばらくの間一人は長く口づけを交わしていたが、それを止めたのは男の方だった。

いつしか雨の音は消え、もつすでに音楽は止まつていた。静寂が時を止めるような感覚が襲つ。

「あなたが必要なの……」

穏やかな表情を作つた男は女の胸や陰部に手をやる。女は少し悶えながら甘い吐息を吐いている。柔らかなモノはいつもすばらしい……。男は女を脱がし体中をゆっくりとゆっくりと堪能していくた。

なぜ！ 僕は！ このオソナを抱くのだ！？

た。

ローリング・ストーンズのバラードが静かに流れ、窓からは薄日が射そうとしている。窓から微妙な風が入つて、全てを浄化させていく。部屋はもう微かな青が闇を殺し始めている。ベッドの中での寝息を立て女は静かに眠つている。

男は手にナイフを持つて「サトミ」の寝顔を静かに微笑みながら見ている。

柔らかい……。見ろよ？ こんなに柔らかでなめらかなんだぜ

.....。

ナイフは女の胸に突き刺さる。鮮血はベッドのシーツを紅く染め、床をまるでキャンバスのように塗り変えていく。命の色をしたその液体は命を消す瞬間こそが美しい。

男は目を擦る。目のかゆみは取れた。いい朝だ。

「おはよう。見ろよサトウ、音のない世界だ」

ジジ.....ジジ.....ジ.....

2008年××月××日。

その日の夕刊にとある事件が報じられた。

『××署は××日、交際相手を刺殺したとして、××都××区、デザイナー、富下眞人容疑者（32）を殺人容疑で緊急逮捕した。刺したことを探めていたところ』

調べでは、富下容疑者は同日午前6時すぎ、××都××区、交際相手の崎山聰美さん（30）の自宅マンションで、ナイフで崎山さんの胸を刺して殺害した疑い。

崎山さんは数ヶ月前から仕事を通じて知り合った富下容疑者と交際していた。午前1時ごろ、崎山さんが富下容疑者の部屋を訪ねた。

富下容疑者は黙秘を通しており、事件の全貌は分かっていない。調べでは午前7時すぎ、富下容疑者が「人を刺した。自分でも

何故か分からぬ」と自ら通報したことにより事件が発覚。午前7時すぎ、捜査員が現場に踏み込んだところ、ベッドでナイフを刺された状態の崎山さんを発見。すでに死亡していた。同時間、テラスで放心状態の宮下容疑者を確保した。

今後××署は宮下容疑者に追及する方針」

気づくか、気づかないか。

その差は凄く大きい。

私は今、岐路に立っている。

大きな分かれ道。

どちらに進んでもイバラの道。

選択すべき時。

気づけ…………。気づけ…………。

まだ選択が出来るはずだ。

さらなるイバラの道。

それは新たな道を作ること。

## 音の無い世界

誰もが恐怖する。その無い世界に。

誰もが恐怖する。自分のいない世界に。

誰もが恐怖する。もう一つの世界の可能性を。

第六話 「第五話 裏 最悪の裏にはさらなる最悪がある」とに誰も気づいていなかつた

その女は少し濡れた雨を拭い、ゴム紐でとめた長い髪をとき、一際大きく存在感のある六十インチのテレビとブルーレイレコードーと7.1chサラウンドセットとCDプレーヤーとベッドと小さなテーブルと本棚しかないフローリングの部屋を舐めるように見渡し、あなたの部屋つていつも退屈ね、と言わないばかりの田で微笑んだ。

男もそれを認めるように笑い、軽い口づけを交わした。その軽い口づけだけで男は完全に平常心を取り戻したが、そんな単純な自分を認めるように女を見つめた。

そしてじロをとめようとすると女は、そのままでいい、と制し、上着を脱いだ。

仕事帰りのせいだらうか、ブラウスを着たままのようだが、少し前の方も雨で濡れているようだ。そして女は一瞬はつと何かを思いだしたかのような表情を浮かべると、「煙草ちょうどいよ」と一言漏らした。男は無言でラツキーストライクを一本差し出した。「相変わらず男臭い煙草よね」と女は小さな声で呟き、男は苦笑いを浮かべた。女はそのままベッドの上に座り、煙草を口にくわえ、火をつけてと男に促した。

「カバンすら忘れるなんてどうかしてるよね」と、無表情のまま呟く。

煙を吐き出した女は男の全身を目だけで一通り見渡すと、嘲笑うでもなくエロティックでもない奇妙な微笑みを見せ、つけたばかりの煙草を灰皿に消した。

「ねえ……」

サトミは甘えるような誘惑でもかけるかのような態度を取りながら俺の横にすり寄ってきた。

俺はまだかゆみの取れない目を擦りながらサトミの髪をそつと撫でてやつた。

だが、俺の不安は目のかゆみと同じく無くならない。サトミの行動が分からぬ。

いつもと同じ時間を過ごすはずだった今日が、非日常のようと思える。自分の部屋なのに、見知らぬ部屋のような錯覚に陥る。

明らかに不自然だ。髪をいつものように撫でたが、サトミの態度が少し不自然だった。オマケにカバンを忘れるなんてどうかしている。（それは本人も認めている）

この微笑みにしてもなんだというのだ？

「ゴークある？ 無ければこの際ハッパでもいいわ」

今日は何もない。俺はそう言つた。本当はあるが、不自然なサトミに与えるべきものではないと判断したからだ。

サトミは舌で唇を濡らし、艶がかつたその唇を、ナイナライ

ワと動かして見せた。

その表情には感情が何も見えなかつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

少なくとも1時間は経つたであろうか。

俺もサトミも何も話さず、重い空気だけがそこにあった。

何もない表情なのに酷くエロティズムを感じさせる。俺は迂闊<sup>うかつ</sup>にも勃起しそうな感覚に見られ、体が小刻みにブルブルと震えそうになつた。それはオルガスムスを連想させ虚脱感<sup>きよだつ</sup>をも連想させた。恥を感じ股間を押さえそれに耐えた。

俺は恥ずかしさを隠すかのように、サトミを後ろからゆっくりと抱きしめた。そしてそのまま俺の手はサトミの胸へと手をやる。俺の手はそのままブラウスのボタンを上から、一つ、二つと外していく。後ろからではサトミの表情は分からない。物動じない彼女の気配から表情が伺えないことが分かる。しかし俺の手の動きは止まらない。三つ目のボタンを外したところで、俺の手はブラジャーの中に入つていく。柔らかい感覚が俺の下半身に直撃していく。俺の右手はサトミの右胸をゆっくりともみ上げていく。あえて乳首に触れない。俺の手が動く度、サトミの体が少し揺れる。そして俺の左手はサトミのスカートの中に入つていく。すぐに下着の中に手を入れる。

### 人格。

ふと、頭に横切つた。サトミに人格が感じられない。人を形成させる為の格。それが見えてこないのだ。だから、その顔はマネキンのようにも見える。あの微笑みが美しいサトミは一時的にしても何処へ行つたのだろう。

俺は左手を下着の中から取りだし、右手も胸を触るのをやめ、サトミの肩に手をやろうとした。

「夢見たのよ……」

サトミは振り返り、軽く俺の唇に触れるか触れないくらいのキスをすると微笑みを浮かべながら笑つて言つた。そしてその微笑みには「微笑み」が無かつた。

「アナタと初めて会ったあの日、あの夜のこと。覚えてる?」

サトミは遠い目をしながら聞いてきた。あの日? あの夜?

そういえば、何故か記憶が曖昧だ。

「ああ、もちろんだよ」

覚えてることと言えば、覚えてる。だが、何か露がかった記憶で、うまく思い出せない。

「もちろんって?」

サトミは相変わらず遠い目、ところよつ、焦点があつていないうまく見えてない。表情で俺に問う。

「何故そんなことを聞く?」

俺は答えるのをためらった訳ではない、サトミの質問の意図が見えてこない。「不用意に答えてはいけない」俺の本能がそう言つてゐる気がした。

「あの日、あの夜……」

サトミは何も表情を変えずに呟いてる。何かがおかしい。

ジジジ……ジジジ

サトミはベッドの上で、裸のまま動かない。その胸にはナイフが刺さって、血が流れ、ベッドのシーツを赤く染めている。

ジジッ……

なんだ！？ 俺までおかしくなつてきたのか？ 脳裏にサトミの死体が過ぎる。いや、見えたようにも感じる。錯覚？ 妄想？ いや、そのような類たぐいのものじやない。それはあり得ない。現実……だ。分からぬが、現実のことにしか思えない。では一体なんだと いうのだ。

サテ二は俺の隣にいる、間違いない。時折襲うノイズのせい？

違う！！！！！

俺は目の前のテーブルに置いてある、ガラスの灰皿をテレビに投げつけた。ガラスの割れる音、鈍い音、よく分からぬ音が入り交じる。

あの田、あの夜、あの田、あの夜、あの田、あの夜、

の上にで始めた。

叫ばずにはいられない。

力 外 力 外 力 外 力 外 力 外 力 外

否定……そこへた  
否定しなくてはならぬ  
俺か俺である証明

をしなくてはならない!

「耳が痛いの……」

サトミが突然言った。ふいに現実。その一言で俺は我を取り戻した。テレビも壊れていない、灰皿も目の前にある。俺は夢を見ていたのか？　いや、さっきのも現実……と思う。現実の交差、そういう言えばいいのだろうか。結論の出るようなものではないのは確かならうぞ。

俺は煙草に火をつけ、少し落ち着かせることにした。出来れば

さつきの体験をなかつたことにしたかった。

「耳？ その前にちょっと聞かせてくれ。今、俺何かしてたか？」

「無駄だとは思つたが、聞かずにはいられなかつた。

「特に何も？ 田を擦つたくらいでしょ？」

「あなた、何を言つてゐるの？」と言つたが、口調でサトミは答えた。「なら、いいんだ」と俺は言つた。夢でもない、現実でもない。だとするとなんだ？」

ちよつと待て。「田を擦つた」だと、俺はそんなことをした覚えは無い。無意識なのか？

「それで、耳がどうした？」

「耳がイタイのよ。奥の方がズキズキするといつが」

「耳？ 違和感を感じる。なんだこの違和感は。」

「酷くイタイ時もあるんだけど……特に何があつた訳でもないの。今はそんなに痛くない」

ジジッ……

一瞬、サトミがブレたように見えた。今日の俺は明らかにおかしい。いや、サトミが来てから……そんな気がする。何故か身の危険を感じる。何故だ。

「あなたは大丈夫？」

一瞬、サトミの目が生きたように見えた、無表情のまま話すサトミの表情が一瞬戻つた気がした。こつものサトミ。俺の愛したサトミ。

「俺は問題ない。それであの日がどうした？」

「問題無い。とは言つたが、何か「耳」の話しを聞いてから、「耳」に違和感を感じる。まるで自分のモノではないような。「音」が何かのフィルターを通して聞こえてくるような。そんな違和感。薄い壁に耳をつけて、向こうの部屋の音を聞くような感覚。「今日」という違和感を比べたら、そんなに大したことではない。

「『あなたと出会つた日』があるのは当たり前のこと。それが夜だつたと私は記憶している。でもね、何か靄がかつてはつきりと思い

出せないの。それどころか、今日ここへ来る時、私は『ある重大な決意』をしてここに来たの。でも、それがなんのかすら思い出せない……』

## 暗転

2008年××月××日。

その日の夕刊にとある事件が報じられた。

『××署は××日、××都××区、デザイナー、富下真人容疑者（32）と××都××区、交際相手の崎山聰美さん（30）が崎山さんの自宅マンションで、死亡しているのを発見したと発表した。

崎山さんが会社に出勤せず、連絡も無いことを不振に思つた会社側が警察に通報。××署員が崎山さん宅を訪ねたところ、富下さんと崎山さんの遺体を発見した。

死因は両者ともに耳からの出血が酷く、出血多量での死亡と思われる。直接的な死因は現在分かつていない。争った様子もなく、自殺の可能性も低いことから、事件性が高いとして、××署は捜査

中』

## 「序」 第七話「創造と想像」

音の無い世界

誰もが恐怖する。その無い世界に。

誰もが恐怖する。自分のいない世界に。

誰もが恐怖する。作られた自分に。

### 第七話 「創造と想像」

真っ白な空間……。

そこは「何も無い」と思えるような空間。

それが何なのかすら想像出来ないとも思えるような場所。全てが曖昧で、全てが説明できない空間。

そんな場所、いや、空間に初老の男が唯一の存在であるかの如く、そこにいた。

「ほほう。ついにあなたは『』まで来られましたな」

初老の男は言つ。

「あなたは想像出来ますか?」

全てを見透かすかのようだ、話しを続けてくる。

「『想像は時として、創造するものである』この意味にそろそろあなたは気づき始めたのです」

淡々と話す、初老。

イメージしてください。

初老をイメージしてください。

あなたの思う、初老をイメージしてください。

「理解出来ましたかな?」

初老はあなたに問いかけています。

「いいでしょ。ここで一つの『答え』を教えて差し上げましょ。」  
初老がヒントをくれるようだ。

「『真の田』とはキャンバスのようなもの。言い方を変えれば『紙』です。そこには何かが足されていくのです。それは何でしょ?」

A : 絵  
B : 文章

「『A』なのか『B』なのか、その答えに意味はありません。あなた自身が選ぶ。それだけなのです」

しばしの沈黙

「二つの道があるとしましょ。どちらの道を行かれますかな？」

目の前に、看板がある。

右ルート・先には崖があります

左ルート・先には大きな川があります

「さあ、この物語の行く末を見守るもよし、ここで下車するもよし。」

・

ここで少しの間を置いて。

「今こそ、物語は真実に向かつて動きだします。あなたには選択して頂きたい」

A・続きを読む

B・やめる

「『A』を選択されたあなた。もう少しお話を聞こう……」

初老は立ち去りうとしています。

初老が何かを言おうとしています。

「言ひ忘れていました。よく田を凝らして、『覗なさい』。別の道が見えるやもしれません」

初老は立ち去りました。

お待たせいたしました。当船は出航いたします。

暑い日は続く。

佐々木信孝ささきのぶたかの部屋は暗く闇に覆われていた。陰気くさい、そう表現できるような雰囲気が立ちこめている。

気づけばもうセミの声が聞こえる。いつの間にかもう夏なんだな。この部屋はいつもエアコンを効かせてるから、季節感がいまいちよく分からない。日付を確認するとすでに八月に入っていたようだ。我ながら季節感の無い生活に苦笑する。

カーテンも完全に閉めきっているので、昼夜よのなのか夜よのかさえ、判断しづらい。時計が狂つていれば、本当に昼夜が分からなくなつてくる。

窓が小さいからカーテンを閉めるだけで部屋は真っ暗になる。オマケに部屋は電灯すら消した状態なので、昼でも真っ暗だ。この部屋主の信孝以外なら何処に何があるのかすら分からぬだろう。

時折、エアコンの風で揺れるカーテンの隙間から一瞬差す光が昼夜の判断を助けてくれる。だが、それすら煩わしい。

信孝がいわゆるニートを始めてから、恐らく数年経つが、実際どれくらいやつてるかは本人にもよく分からぬ。確か今は二十三歳になつていたはずだ。それくらいもう感覚が麻痺している。長いこの生活ですっかり太つてしまつた。いわゆる「デブ」までのいかないにしても、十分にメタボリック症候群には違ひないだろう。どうも最近は体の節々も痛む気がする。

ニートというと、部屋から全く出ないイメージを誰もが持つんだろうけど、俺はたまにだけど外に出る。トモダチだつている、つもりだ。他のニートと一緒にされたらたまらない。

信孝は絶えず付けっぱなしのパソコンのモニターをぼーっと眺めながら、そう考えていた。終始爪を噛んでいたことに本人は気づ

かず、理由の付け所がない理不尽な苛立ちを覚えるのは何故だらうか、と考えている。「変わりたい」と願うだけの生活。

数年前から、あくまで恐らうだが信孝は「鬱病」になっていた。自覚症状はある。何度かネットで「鬱病」について調べたことがあったが、その症例と自分が酷似していることに気づいていた。専門医にかかるて検査した訳では無いが間違いないだらう。

コンコン。

ドアをノックする音が聞こえる。

またあの女か……「あつ」「あつ」と自然に出る舌打ちと共に一瞬の殺意を覚えるが、ぐつといじらえる。そして信孝はそれが当たり前のように無視する。

コンコン。

再びノックがする。苛立ちがせりて自分の中で大きくなつていくのがよく分かる。

「信孝……ちよつと話しましょ。母さんあなたのことが心配なのよ

おまえに俺の何が分かるんだ？ 話しましちゃうだと？ 俺は話すことなんて無い。顔を合わすのも嫌だ。ウザいんだよ。再び殺意が信孝の中で暴れようとする。

「つるせえよ！」

思わず出た罵声と共に田の前にあつた漫画雑誌をドアに投げつけた。もはや自分の行動に何の意味も無いことを信孝自身もよく分かつていた。

ふと思つことがある。何故素直になれないのか。何故怒りが出るのか。しかしつもその答えは出ない。

「……母さんね、離婚決めたから

母親はそう告げると、一階へ下りていつたようだ。

もはや涙の涸れ果てた母親の無氣力なその言葉には、何かしら諦めのような意志がドア越しからでも感じられた。

信孝はぽつり、「知るかよ…」と口に出した。

頭の中が白くなつていく。何も考えられない。怒りと無氣力が頭の中をせめき合つ。クソ親父にクソお袋。どうでもいい。俺の前から消えればいい。離婚？ むしろありがたい。いつそのこと死ねばいいのに。離婚の原因だつて俺のせいなんだろ？ そりやつてなんでも俺に責任を押しつけやがる。

信孝はそう思つが、視界が悪くなつっていく。目から涙がこぼれ落ちる。

「ちくしょう！ 知るかつつつつつつつつつつつ！」

毎日が同じつまらない日々。しかしそれは突然訪れる。

まだこの時、俺は何も知らなかつた。知らなければよかつたのに…

俺はいつものようにインターネットを見ていた。そう、ただ見ていただけなんだ……。

涙を拭い、「何もなかつた」そう自分に言い聞かせ、煙草に火を付けた。

そんな時に目についたのが『有名デザイナー再逮捕』というタイトルのニュースだつた。タイトルをクリックし、内容に軽く目を通した。どうやら以前少し話題になつたニュースの続報のようだ。某巨大掲示板の「ニュース速報板」でも当然のようにスレッドが立つて、あつという間に埋まつてしまつたが、数日も経てばいつの間にか誰も見向きもしなくなつていた。

「有名デザイナー」とあるが、実際にはそんなに有名ではなかつたようだ。むしろこの事件で有名になつてしまつたほどだ。俺も知らなかつたし興味も無い。

軽く目を通したが、内容は思つた通りそんなに大したものでは無かつた。

逮捕されたデザイナーの自宅から覚醒剤が見つかり、交際相手

から麻薬反応が出たから再逮捕。要略すればそんな感じだ。よくある話だし今更驚くようなものでもない。

「大した事件でもないし、つまんねえな」

思わず口に出てしまつ。

最近は変なニュースが多いし、特別変わった事件でも無い限り、記憶に残らない。この事件 자체もすでに風化しているようにしか見えない。

しかし「つまらない」と思ったことには変わりないが、なんとなく気になつた俺は、再び某掲示板から該当するスレッドを探した。少し下がつた状態ではあつたが、すぐに見つかった。やはり以前ほどのレスの量はなく、内容も冷めたものばかりだつた。

『15・そういうやそんな事件あつたな』

『33・ヤクの所持なんて初動捜査で見つかってんだろ？ やつぱ

警察無能だな』

『35・聰美たん、ハアハア』

『37・くく35氏ね』

『42・密かに宮下デザイン好きだつたんだけどな』

『51・税金の無駄だな』

『63・くく42俺もそうだわ。アンシンメトリーがいいんだよな。最近はキャラデザもやり始めてたみたいだし、これからだつたのにな。』

『72・また一つクソデザが世から消えたwww』

どうでもいいような内容ばかりの書き込みが目立つが、意外と擁護者もいることに少し驚いた。少なからずファンもいるようだ。そもそもこの宮下が何のデザインをしてたのかもよく分からぬのだが。

以前より書き込み量は少ないものの、スレッドが立てから3時間で150件の書き込みがあつた。勢いとしてはそこそこあるが、

どちらにしてもすぐに忘れられるんだろう。

そんな中、一つ気になるレスを見つけることが出来た。こんな  
掃きだめのような掲示板の中に気になる書き込み。

何故それが気になったのか、俺はその時まだ何も気づいていな  
かつた。

『99：彼はオトノナイセカイの住人になっちゃったんだよ』

「イマドキの女子高生」とは思えないほどのシンプルな部屋。部屋の半分を陣取るベッドの上で、いつものように寝る前も携帯電話をいじる。お気に入りのピンクのクマのぬいぐるみを股に挟んでいるのは、物心ついた頃からのクセだ。

黒沢弥生子ことヤエは今夜も同じ学校の友達、と呼ぶべき存在かどうかまでは分からぬが、特に意味の無いメールのやりとりをアヤとしていた。「今日何食べた?」とか「何してる?」とかそういう下らない内容だ。

『また明日のテストウザくね?』

こんなメールがアヤから携帯に届く。

わざわざ同調を求めて来られても困る。「愚痴つてくるオマエもウザイ」と打ちかけるが、暇つぶしの相手がいなくなるのは、ツマラナイ。ヤエはそう考へると、打つのをやめることにした。自分はアヤより上でありたい。そう無意識に思つてこらのかも知れない。

同調の返信をしておく。

『うん、ウザい』

するとすくなく返信がくる。

『ちよつときから相づちだけじゃんよ ( ; )』

メンバー。「オマエがつまらないから大した返事出来ないんだよ」とヤエはまた返信しそうになるが、やめて携帯を閉じた。

アヤはイヤなヤツでもないけど、好きなヤツでもない。たまたま同じ学校に通つて、たまたま同じ教室にいるだけの同級生。共に下らない高校生活で『青春』を送るだけの付き合い。我ながら『青春』とかアホらしいことを考えちゃったな、とヤエは眉をこじる。

再び携帯が振動する。

最近は携帯の音が鬱陶しくて、バイブだけにしてる。いわゆるマナーモード。着うた流したりするなんてどうかしてる。今時そ

んなヤツ勘違いしたおつせんとかおばせんしかいないんじやね？  
とヤエは思う。

眉をこじることに熱が入り始め、携帯を開けることも億劫になつてくると、せらりとイヤなことを思い出した。

#### 夏期補習期間。

テストで赤点を取つた者だけが夏休み期間中の数日間の補習に出なくてはいけない。

オマケに明日は補習最終日でそれ自体は有難いが、テストが待つていてる。非常に不愉快だ。

ま、アタシには勉強なんて必要無いから、何もしないけど。補習を受けること自体が本当にウザくてヤダ。どうせアタシには勉強なんて必要無い。大学に行くつもりなんてないし、結婚するまでは家事手伝いとこつ名前も出来る。ほどほどにバイトして、テキトーに男作つて……。あー、なんか人生どうでもいい。

ヤエは「はあ……」と溜息をつきながら、面倒ながらも携帯を開いた。

『どうでもいいナビ、暑いよね』

どうでも良いなら、言つな。暑いのはオマエだけじゃない。

ああ、今日のアタシ駄目だ。何に対しても悪態ついたやう。暑いのにも関わらずアーティスト壊れちゃつてるし。オマケに生理一日目だし。もう今田はまつといて欲しい。でも言えない……。

ウザいけど返信することにした。

時間はまだ23時。いつも寝るのは1時だからまだまだ時間はある。だからと言つて当然勉強する気も無い。この時間は面白いテレビもやつてないし、そもそもテレビがつまんない。ネットをやるうにもアーキにいちいちパソコンを貸してと言つのもメンドクサイ。結局、今のヤエにとって、アヤとのメールをして暇を潰すしかあることが無いのだ。

『あつつかー、うち今エアコン壊れてんだよね（ノヽシクシ

ク

どうでも良いく内容にさせどうでも良いく内容で返す。

『まつじい～？ それってマジ大変じやん（くわん）』

やらにどうでも良い返信がすかさず来る。アヤも相当暇な  
うつ。アタシも同じ格むじなということか、とヤエは思わず苦笑する

『暑くて暑くて死んじゃう』  
——テツ

る。いつまでこんなやりとりをすればいいのか……。我ながら呆れ

『ホント死んじゃうよね。ケータイの電波悪いなあ?  
なんてか  
なあ?』

アヤも相変わらず、つまんないメールの返信を返していくる

本当に呆れてきた。どうでも良い内容にどうでも良い内容で返すアタシ。アタシ自身にも呆れてきた。

もついでに上記のサイトにでも書き込んでおいてください。

みようかな。暇な状況となんかイライラする「今」をかえたい。生理の二二三二の際<sup>ひざれ</sup>に、いもぢうが、ドン<sup>ドン</sup>、それはなんのアラブな

……。あー、なんかキモいね、アタシ。

すでにヤエは麻痺していた。たかがメールのやりとり。しかし

それは大きな悪意にも似た魔（闇）が人を不安にするのだ。

珍しくアヤからの返信が遅い。

いつの間にか返信を待つ立場になつてゐる気がする。携帯電話つて本当にどうなんだろう。便利だし確かに持つてないとかあり得ない。でも、いつも受け身。携帯電話はアタシの都合を考えてくれない！

ヤエは落ち着きを失っている。気づけば「メールの返信をじつと待っている」のだ。世間ではこれを依存症と呼ぶ。しかしそれはヤエも自覚していることだ。

眉をいじるのを再開しようかと思つた時、少しタイミングが遅れて、アヤからの返信がきた。そのことにヤエは安堵感を覚えるが、一瞬でそれは違つていると再確認する。認めたくないのだ。なんでもアタシがアヤのメールを待たなきやなんないんだよ……。そう言い聞かす。

『まーいいやー。話し変わんだけどお おく?』

『ん? 状況が変わった。』

少し何か違和感を覚える。ちょっと一瞬寒気がしたような、そんな違和感。何がどう違和感があるのかまでは分からない。そういえば、中学の頃も同じような違和感を感じたことがある。あの時は……ま、いいや。とにかく返信しよう。

『おくだよ ナニナニビーしたのぉ?』

興味を持つてしまった、アタシ。ヤエは何かもう逃げられないような気が一瞬した。

1分、2分、3分…もうすでに5分が過ぎた。たかが5分。しかしアタシら女子高生には十分すぎる長い時間。

「10分ルール」というものがある。10分以内にメールの返事をしないヤツはハミられる。それがアタシらのルール。ひょっとしたら10分を超えるかも知れない。

流石にアタシは心配になつてきた。何かトラブルつた? 急いで電話をかけようと、電話帳（携帯の）からアヤの番号を探し出した。そしてかけようとしたとき、一件のメールが届いた。

ドキッと一瞬したが、そのメールはなんてことのないもの。出会い系の宣伝のメール。恐らく業者かサクラのメール。内容は下らない。そもそもアタシは女だ。

一瞬緊張の糸が途切れた気がした。

ベッドに寝転がりながら、ベッドの下に隠しているレディースコミニックを取り出す。意味もなくページをめくり出す。それでも何か落ち着かない気がした。

しかし。バイブは再び鳴り始めた。

ブーブーブーブーブーブー……

慌てて、メールを開いた。もちろんそれはアヤからだつた。

『オトノナイセカイのウワサ知ってる?』

すでに時間は夜中の一時を指していた。

渋谷のとあるビルの地下にBARがある。とりわけ特別有名でもないその店に男が一人。

平日のこの日はいつもより客足も悪い。

夏に入り気づけばもう八月。温暖化のせいだらうか、例年以上のこの暑さはたまらない。元々客の入りは悪いが特に今日は酷いものだ。

店の名前は「Lanthanein」。ギリシャ語で「隠れる」の意味があるそうだ。英語でいつところの「Lanterne」。いわゆるランプのことのようだ。これまた渋谷の雰囲気とはまた似合わない。一見するとドイツ辺りの街並みに似合いそうだ。

オーナーはいわゆる土地成金で富を築いた運だけで生きているような男だ。この店にしても自分がゆっくり飲みたいだけの為に作つたそうだ。自分さえ飲めればいい、時々女を連れてくる隠れ家としても使える。それだけの為に作つたと聞かされている。

渋谷を選んだ理由にしても土地を転がしたついでと言つても差し支えないほどで、当の本人にしてみれば、どこでもよかつた訳だ。しかし成金がオーナーの割には以外とセンスの良い店。つと陰でよく言われる。成金がセンス悪いとは言わないが、その傾向があるのには違ひないだろう。シンプルでありながら飽きさせない造り。恐らく良い建築デザイナーを使ったに違ひない。

オーナーはそれほど頻繁に姿を現さないようだ。「何の為に作つたんだ?」と誰もが思うといつ。

カウンターの中に一人、ヨネはグラスを磨きながら、ぼつりと呟いた。

「俺は……本当に情けないヤツだ……」

半年前に上京してきたヨネはヤマザキという男と知り合った。たまたま入ったこのBARで知り合った。たまたまというのは

ある意味語弊かも知れない。ヨネは自分の目指すもののために数々のBARを渡り歩いた。有名店から評判の悪い店、隠れた名店。

ヤマザキと出会ったこのBARはとりわけ有名でもなく、流行っているような店でも無かった。全てが「普通」。しかしその普通こそが難しい。それはある意味全てのバランスが調和されていた空間だった。カウンターに三人。座った席の隣が、ヤマザキだった。

もうかなり前の出来事のように感じる。今もこうしてこの「anthanein」でバー・テンを出来るのも全てはヤマザキのおかげだ。

今に満足はしない。しかし半年前と比べるとヨネの心境もかなり変わつて落ち着いてきた。だからと言って全てがうまくいくつてはいる訳でもない。

ただ、環境が変わったこと、今の自分にあった「居場所」を見つけることが出来たということにはそれなりに満足していた。もちろんそれはヤマザキに与えられたものだから、本当の意味での居場所では無いのかも知れない。

半年前、ヨネはバー・テンダーとしての誇りをいつも持つっていた。仕事もそこそこ順調で自分の技術が周囲に認められはじめていた。しかしその周囲の反応も空しく、当の本人は悩みを抱えていた。周囲には決してそれを見せない。決してそれが美学だと考える訳ではないが、それはヨネ、米田祐希よね たかよしとしてのプライドであった。

「もう俺は限界なのかもしれない」

技術的にある程度まで来た。だが、それ以上を目指す本人にとって、これほど壁を感じることはなかった。所詮は井の中の蛙かわづ。俺は何も知らない。

「ヨネはいつもそやつて自分の殻に閉じこもるのね。周りに悟られないように、いつも周りに合わせてる」

ヨネが姉と慕う女性からの痛烈な一言だった。

ヨネは昔から一際目立つ存在だった。良くも悪くも周りにアピールする、自己主張の強い人間だった。しかし周りからは冷めた目で見られることが多く、空回りしていることが多かった。

本人もそれを自覚していたようだが、それでもその立ち振る舞いをやめることはなかつた。仲の良い連中にはウケが良かつたのかも知れない。ヨネ自身、他の連中はどうでも良くて、自分が心を許せる人間だけが自分を分かつてくれればいい、いつもそう思つていた。いや、本当はただ藻掻いていただけなのかも知れない。

高校の頃、いつも一緒にいた仲間がいた。仲間と一緒にいるのは楽しかつた。恋愛のこと、学校のこと、社会のこと、心のこと、下らないこと。なんでも話した。

ある日、女友達の前で号泣したことがあつた。俺を黙つて抱きしめてくれた。

俺が俺であるために俺は立ち向かわなければならぬ。

どこかの誰かが歌つたあの歌のように俺は生きていたかつた。しかしそれはプレッシャーとなり、強くなつたつもりでいた俺を押しつぶそうとした。

しかしあの子は俺に言つた。「大丈夫だよ」と。

他の仲間もその場にいた。それに同調するかのようだ。彼らはそつと見守つていた。かけがえの無い友。俺は独りじゃないんだ。

俺は生まれ変わつたような感覚を得た。しかしだからといってその日から何かが変わつた訳では無かつた。俺はみんなに迷惑をかけているのではないだろうか。

いつも本心を語ることを邪魔をしていたのは他でもない、自分だった。

そう、あのヒトが言つよう、ヨネは自分の殻を打ち破ることは出来なかつたのだ。

コメ。コメを語ったあの時代。コメを追いかけたあの頃、あの時、あの記憶。

俺はいつまで足踏みをしているのだろう。踏み出せないもどかしさ。いつまで経っても俺はこの「場所」から動けない。

「無理に動く必要なんてあるの?」

「踏み出していくの? その前にあなたの『コメ』が本当にあるの?」

「あなたの『したいこと』ってその『コメ』なの?」

夢で言われたアナタの言葉。俺は何も答えられない。

「ふんっ。夢の中で言われた? 甘えるな。それは言われたんじゃねーよ。自問自答だ」

はははっ。アイツならそういうだろうな。そうだな。俺は「怖い」んだ。進んだ先、そこにあるものが怖い。

「甘え」か。それも含めて認めなくちゃいけないのは分かつて。ひょっとしたら俺は誰かに認めて貰いたいのかも知れない。それが誰なのか、あのヒトなのかアイツなのか。それとも。

気づいたとき、俺は地元を離れる決意を固め、誰にも告げずこの街にやってきた。

店の入り口のドアがゆっくりと開いた。客のようだ。

「いらっしゃいませ」

グラスを磨きながら客の顔を見ずに言った。見るまでも無いヤマザキだ。

「ヨネ、仕事はどうだ? 順調か?」

ヤマザキはカウンターの一番端に座ると、煙草をくわえ、火を付けながら言った。「俺自身はそれなりに。店はご覧の通り」と俺は答えた。そのやりとりに互いが苦笑いする。

「オマエさ、自分の店を持ちたいとか言ってたな。今はまだ無理だろうが、俺が店の名前を付けてやる。この名前をやるよ。『maverrick』。どうだ、一匹狼を気取ってるオマエにぴったりの名

だろ？「

そう、俺のユメ。いや、ユメなんかで終わらせるか。俺の現実にしてやる。

「ありがとうございます。ヤマザキさんには何もかもお世話になりました。その名前気に入りましたよ。でも、使うのはまだまだ先になります……やなあ……」

少し笑いながら感謝を示し、俺はそう答えた。俺の目標。それは紛れもない俺の言葉だ。

そしてヤマザキは「話は変わるが……」と真剣な眼差しを向けてきた。

「オトノナイセカイの話を聞いたことがあるか？」

父が死んだ。

それはもう十年前の夏だった。丁度、今頃の季節。暑い日が続きた、当時の最高気温を記録した、とテレビの淡々としたニュースを聴気に記憶している。湿気が酷く雨が降り始めた頃のことだった。

八月八日。この日が父の命日。すなわち、今日だ。

お盆を待つことなく俺たち家族はいつもこの日で墓参りに来る。お袋と妹の三人。いつまでこの三人で親父の前に来ることが出来るのだろうか。

「なあ、親父。俺もう二十二になつたんだ。来年はひょっとしたら四人で来るかも知れないよ。再来年は五人だつたりしてな？」

俺は数珠を持った両手を合わせ、心の中で親父に話していた。親父がこの報告を喜んでくれるかどうかは分からぬ。まあ、あの親父のことだ。普通に喜ぶとは思う。

過去がどうであれ、この年になつて、自分が家族を持つかも知れない状況に立つた今、なんとなくだが親父のことが分かつた気がした。

命日を迎える度に思い出す。小さかつた頃のことを。そう俺が

幼少の頃のこと。全てが楽しく輝いていたあの頃を。

黒沢冬哉は自分の父親の墓前で、まるで父親と話すかのように、

少ししゃがみ込んだ。

その頃の俺は父を「凄い、なんでも出来る、何でも知ってる、世界で一番強い」そう思っていたような気がする。

父親は常に子供に対しても思つてはいけない、それが父親というものだ。臭い言い方をすれば「男は背中で語る」。それの象徴が父親だったと思つ。

俺もまたそれを信じていた。しかしそれは裏切られることとなる。いや、気づいたと言つべきなのだろう。

当時、俺は中学生で思春期真っ盛りの頃だつた。思春期がそうさせたのだろうか、俺は父が嫌いだつた。顔を見る事すら嫌で話す事も拒んだ。とにかく嫌で仕方なかつた。

今思えば何故笑つて話す事が出来なかつたのか。そんな感傷的な気分になる事自体、今の俺は酷く不安だ。それでも幼かつた頃の親父と一緒に遊んだ記憶を辿ると、自然に笑つてる俺がいる。「あの頃は親父が大好きだつたんだよな……」

父は月に一度の安いサラリーを手にする為に夜遅くまで働いていた。不器用な父だという事に気づき始めたのは中学に入った頃だつた。この頃から家族の歯車が狂いだした。

妹は俺と6つも年が離れている。俺も不安を抱えたが、妹はもつと不安だつたのかも知れない。確かにこの頃妹はまだ幼稚園に通つていたように思う。友達の環境と自分の環境の違いに得体の知れない困惑もあつたようだ。

去年の墓参りの時、俺は妹に当時のこと聞いてみたが、あまり覚えてないと言つた。ただ、妹にとつて親父は「優しいお父さん」だつたようだ。

親父に限つたことではないが、崩壊したのはうちだけではなかつたようだ。父権の崩壊。近代化の崩壊と共にそういう意識が芽生え始め、この国はダメになつてしまつた。世の父親がダメ親父のレッテルを貼られるようになつたからだ。

親父もまたその「ダメ親父」のレッテルを貼られた一人になつてしまつていた。家族からそして社会から。

戦後、日本は「追いつけ追い越せ」の精神で、世界でも胸を張れる国家となつた。近代化の成功。それは良いことだけではなかつたようだ。いわゆるバブルの崩壊。これが近代化の終着駅となつた。

頑張つて近代化を成し遂げた「おじさんたち」は腑抜けてしま

つたのである。最高を手に入れ、周りが見えなくなつたのかも知れない。

父はまじめだけが取り柄のえない男だった。母親は何故この男を選んだのだろう。俺には分からなかつた。中学に入つた以来、ずっとこれが疑問になつてゐる。しかしその疑問について母親に尋ねたことは一度も無い。

自分でも気づかなかつたが、「愛」が無くなつてゐるという現実。それを知るのが怖かつたのだ。この年になつた今も母親には聞くことはなく、もちろんこの理由は分からない。

いかにまじめであれ死の使いは平等にやつてくる。それが人より早かつた。いや、早すぎたというべきか。

胃癌だつた。発見が遅れた為、各臓器に転移しもはや手の付けられない状態であつた。直接の死因は肺癌によつて出来た血の気泡のせいだつた。

社内の健康診断で引っかかり、病院へ行つたその日、親父は死の宣告を受けたのだつた。余命一ヶ月。それはあまりにも残り短い余生だつた。

すでにこの頃父の様態は良くなかった。今思ひ返せば顔色が悪く、咳き込んでいたように思つ。心配した母親はいつも「大丈夫?」と聞いていた。決まつて親父は「大丈夫だ。ちょっと疲れが溜まつてるだけだよ」と笑つていた気がする。

その笑顔が痛かつた。親父が嫌いな俺にとって、その笑顔は強烈に俺を刺激した。心底憎めなかつたのは親父の周りに心配かけますまいとするその心だつたのかも知れない。

数週間前から家で時折見る父の姿は半病人に近いものがあつた。本当は心配だつた。しかし嫌悪していた俺には出来ない事だつた。

親父の死はあつけなかつた。

その日学校から帰ると台所のテーブルに母親からの置き手紙が置いてあつた。

『お父さんが緊急入院。冬哉も帰つたらすぐにきて』

一緒に病院の連絡先が書いてあつた。一瞬ためらつた。行くべきかどうか。俺にその資格があるのかどうか。そして俺は悩んだ末、行くことにした。

急いで病院に行つたが、時すでに遅かつた。俺は親の死に立ち会えなかつたのだ……。

悲しかつた。親の死がこんなにも辛いものだつたとは。悔い。何故俺は親父を認めることが出来なかつたのだろうか。何故憎む必要があつたのだろうか。

何故俺は向き合えなかつたのだろう。親父に。そして自分自身に。

中学の頃、親父と激しく口論になつたことがあつた。些細なことからの衝突だ。どこの家庭でもよくあることなんだとは思つ。

親父を罵倒した。親父を否定した。しかし親父はそのことには何も触れなかつた。それは親父自身がよく分かつていてことだつたのだろう。今にして思う。あの時親父が俺に言つたこと。

ただ時々思う。あの時、病室に入つてもうすでに死んでいた親父を見たとき、「本当に悲しかつたのか?」と。病室に入ったとき母親と妹が泣いていた。俺は「つられて泣いた」のではないのかと。今となつてはもう分からぬ。だが、今は違つ。

後悔の念はいつも取り返しのつかない自体になつてから訪れる。

「なあ、母さん。俺さ、親父に謝りたかったよ」

せめて母親に本当のことを言つておぐべきだと俺はその時思つた。

「その気持ちさえあれば、お父さんはきっと幸せよ。つづん。

冬哉と弥生子が今こゝしてお墓の前にいる。やることが何より、お父さんへの贈り物よ。後悔しちゃ駄目」

かくのミンミンゼミが鳴く中、ひぐいじの鳴き声も聞こえる。

彼らの鳴き声が鎮魂歌のよつこ俺の心に突き刺さる。

俺は親父の分まで生きなくてはならない。なぜかそう熱く思え

た。

気づけばもう夏は終わりを告げ、秋が訪れていた。

日の差す時間は日増しに短くなつてきてはいるが、残暑とまで  
はいかないにしても連日まだ暑い。

竹内文弥たけのうちあみやことフミヤは田覚まし時計をAM・8・00にセット  
していた。田覚ましが鳴ると一瞬びくんとして起きたが、あまりの  
不快さに田覚ましを投げ飛ばした。

そのまま「うるせえ」と再度夢の中に入つてこりうるが、  
足下に投げ飛ばした田覚ましは再度鳴る。

「うるせえええええええええええええええええええええええええ！」

氣怠い朝。一日酔いで氣分が悪い。

四畳半しかないその部屋は足の踏み場も無いほどに散らかつて  
いた。まるでゴミの中でフミヤは寝ているかのようだ。

「屋根があるだけで路地裏のホームレスと何の代わりも無いんじや  
ないのか？」

と以前高校の頃からの腐れ縁で未だに交流のあるコースケに言  
われたことがあった。

だいたい医者の息子で金持ちのオマエに、んなこと言われたか  
ねーよ。と思うが、確かにそうかも知れない。

俺だつて好きでこんなところで寝てる訳じゃないんだ。もっと  
広い部屋、そุดなビルズくらいの部屋だつたら俺だつて綺麗にす  
るさ。金さえあればこんなところからおせりばだ。別にここが好き  
つて訳じゃない。貧乏ひじが悪いんだ。

会社をやめてそろそろ半年が経つ。退職金が出るほど働いちや  
いなかつた。上司の理不尽な要求にキレてやめてやつた。

いつか殺してやる。そう思つていたが、流石に自分が犯罪者にな  
るのはこめんだ。あんなヤツを殺して自分を人生を棒に振るのは

馬鹿らしい。人を殺しても捕まらない世の中だつたらいいのにな。

いつも毎過ぎからでないと起きないと、何故目覚ましをそんな時間に設定したのか思い出すのに少し時間がかかった。

今日は朝からパチンコに行く。フミヤは大学に入った頃からパチンコにハマつていた。留年したのもこれが原因と言つても過言ではない。周りがスロットにハマる中フミヤはずつとパチンコ一筋だ。気づけば依存症。毎日でも打たないと何故か落ち着かない。しかしここしばらくの間は金が底をついたので行けていなかつた。行かなければ行かないでなんとかなるのだが、一度パチンコのことを思い出すと居ても立つてもいられなくなる。

フミヤはなかなか起きられずにいた。夢と現実の狭間にいるような感覚。

寝返りを打つたとき、頭に違和感を感じた。どうやら頭の下に携帯があるようだ。寝惚け眼のまま携帯を見ると一件のメールの通知がある。

『9/17 (水) 7:27:今日ちょっと会いたいんだけど』

誰かと思えば、ナナからのメールだ。

あの性欲の塊のような女。アイツは俺を道具としてしか思つてねえ。しかもこんな朝早くから何を言つてやがる。バカじやねーの？ 朝っぱらからやめてくれ。時間的に出勤前に打つたようだが、やっぱアイツは俺のことなんて何も分かつちやいない。

アイツと会うのはもはや「義務」以外なんでもない。こつしてメールのやりとりをすることすら面倒で仕方が無い。何にしても俺はまだ「寝てる」ことになつてゐる。返信は今じやなくてもいいだろう。

とにかく体を起こすかと、ようやく重い体を起こし服を着替える。カーゴ系のパンツに「XX」の極彩色のロングTシャツを着ると、部屋のオマケに付けたようなあまりにも貧しい洗面台の前に立ち鏡

を見る。

不精髪を剃るか剃るまいか考えるが、このまま伸ばそつかと思うと、やめるここにした。ワックスを少し長めの金髪に擦り込み整える。シルバーのメッシュの見え方がイマイチ決まらない。仕方ないでキャップを手に取り、少し深めにかぶる。

メールの返信は毎過ぎ頃にでも一応しておくか。しなきゃしないで後々面倒だ。

俺の住む四畳半しか無い汚いアパートから数分離れた場所に、異様なまでに派手な電飾で飾られた店はある。俺の行きつけの店だ。店に着くとすでにかなりの人数が並んでいた。俺は新台狙いではわざわざ朝から並びにきた。並んでる連中が新台狙いなのかまでは分からぬが、ギリギリなんとかうまく座れそうな気がした。

しかし上着を持つてくればよかつたと少し後悔した。いくらまだ暑いとはいえ、もう九月の中旬。朝は意外と冷える。ロンTだけでは少し辛いかも知れない。

煙草に火を付けようとした時、誰かが俺に声をかけてきた。

「よし、おはようさん」

誰だ、と思つたら昨日一緒に飲んだ常連のヤツだ。たまたま誘われて一緒に飲んだが、まだ互いに名前を知らない。

所詮はパチンコ屋で出会つた仲。飲みながら話た内容にしてもパチンコの話や店の話ばかりだ。何を話してたかなんて覚えて無いし興味もない。

年は恐らく俺とあまり変わらないだろ。俺が今23だから、コイツもそんくらいか。背格好も俺と対して変わらない。170センチ前後くらいといったところか。不本意だが恐らく他人から見れば「連れ同士」にしか見えないかも知れない。

「ああ。おはよう。昨日は流石に飲み過ぎた。あつたまイテエよ」

俺はわざと辛そうに言つてみた。特に深い意味は無い。あくまでもなんとなく。

笑いながら男は「確かにアンタ飲み過ぎだよ」と言った。

一瞬頭にくる。笑いながら「アンタ」ってどういうことだ？

俺を誰だと思ってやがる。ま、こんなところでもめたつて何の特に  
もなりやしない。パチ屋から出入り禁止をくらうだけだらう。俺は  
無駄なことはしない主義だ。パチンコが無駄だと言つてしまえばそ  
れまでだがな。

結局開店を待つまでの間、そいつとどうでもいいようなパチン  
コの話で盛り上がる。あの「予告」は熱いだのアレが外れたら不調  
合になるだの、あの演出の時は連打した方がいいとか、いわゆるパ  
チンコ用語の「オカルト」話ばかりだ。

「イツ、ホントにバカだな。パチンコを全く分かつてい  
ない。そもそもコイツはパチンコの仕組みが分かつてないようだ。パチン  
コの「予告」に意味などない。玉が真ん中のスタートに入った瞬間  
に「当たり」か「外れ」かが決まる。それから内部で演出が決定す  
る。どんな予告が来ようがすでにその時に当たり外れは決まつてい  
る。

しかしこいつこいつヤツが逆に「積む」からおかしな話だ。

「そう言えば最近この店の社員が死んだらしいな」

突然男の言い出したことに俺は驚いた。しかし俺は「へえ」と  
あまり興味を示さないような態度をとつてみる。しかし続けて男は  
言つ。

「最近見ないなと思つてたんだが、もう一ヶ月ほど前のことら  
しいぞ」

確かに家からは近所だが、この店に通うようになつてからまだ  
1ヶ月しか経つてない。当然それ以前のことを俺が知る訳もない。  
そもそも店員が辞めようが死のうが俺には全く関係ないことだ。

恐らく昨日の酒のせいだらうが、不意に目眩がした。しかしそ  
れは一瞬だけのことだったので特に気にするようなことではなかつ

た。

「1ヶ月ほど前？ その頃はまだこの店に俺は来てない」

俺はそう答えたが、その男は何故かニヤニヤと不気味な笑いを浮かべていた。

都心から少し離れた隣県に近い山と言つても差し支えのないと  
ころ。そこにある寺に親父の墓はある。例年通り俺たちは墓参りに  
来ていた。

「ねー、アニキ。これってなんなの？」

不意に弥生子は墓を磨く手を止め、指さしながら聞いてきた。

「これ何って、オマエ……。うちの家紋だよ。知らないのか？」

弥生子の指の先には墓に刻まれた我が家家の家紋があつた。

これは確か「矢」をモチーフにした紋だ。かなり以前、親戚の  
誰かに聞いたことがあつたが正確な名前は思い出せない。確かアレ  
は親父の葬儀の時だつた気がする。となると10年も前か。普段  
から家紋に馴染みなんてないし、忘れていても不思議じゃない。ま  
あ、弥生子が知らないのも無理ないか。

弥生子は座り込み、「へー。これが家紋なんだあ」とまじまじ  
と家紋を見始めた。

「で、この家紋はなんていうの？」

太陽の光を眩しそうにこちらを見上げながら聞いてくる。

「なんて言つたつけなあ……。『なんとか矢』だつける？」

全く思い出せない俺を軽蔑するかのような目で弥生子が見る。

「使えない兄貴」そんな風に言われてるようだと思え、いい気がしな  
い。

しかし兄貴ぶつて言つたことを少し後悔した。「どうやら墓の  
手入れは終わつたようね」と言いながら、墓に供える花と線香を取  
りに行つていた母さんが戻ってきた。俺は助け船を出して貰おうと  
したが一瞬遅かつた。

「つんだよー。アニキだつて知らないんじやん。ねえ、母さん、こ  
れなんつーの？」

俺に目を合わせることなく、母の方へ顔を向けた。一瞬軽く睨まれた気がする。

線香に火を付け、花の傷んだ葉を丁寧に取り除いている母さんは「しようがないわね」と言わんばかりに答えた。

「あなたたちが知らないのも無理ないわね。最近の若い人は家紋を知らないもの。目にする機会が減つてるし」

誰かが参つてくれたのか、親父の墓に花が供えられている。しかしすでに酷く枯れていた。この猛暑のため、すぐに花が枯れるのは仕方がないことだが、実際どれくらいで枯れてしまうのか迄は全く分からぬ。ゆえにこの花がいつ供えられたものなのかまでは分からぬ。そんなことより”誰かが花を添えてくれている”ということになんだか少し嬉しくなつた。

その花に「どなたか知りませんがありがとうございます」と母さんが一礼し、取り除くと、さつきからしきりに手入れをしていた花を供え、墓に合掌した。

少しの間を置き、再び母さんは口を開いた。

「ま、私の世代でも意外と家紋を知らないものよ。なんていうか日本文化である家紋もいつの間にか忘れられてるような気がするわね」

少し微笑み、「ほら、ちゃんと拝みなさい」と俺たちに数珠を渡した。

「俺は自分の持つてるからいいよ。それにさつきも拝んだぜ?」

自分が数珠を持つようになったのは社会人になってからだ。高校卒業と共にたまたま知り合いの「ネで就職できた会社はいわゆる広告会社だった。就職早々に上司が亡くなつた。その時急に必要になつたので購入したものだ。

母さんが「口答えしないの」と言わんばかりの表情でこっちを見たので俺は慌てて拝むことにした。弥生子も母さんから自分の数珠を受け取ると軽く拝んだ。

「この紋の名前は『丸に違い矢』っていうの。特別変わった紋じや

ないらしさよ。むしろよくある家紋らしいわ。ほら、あそこのお墓にあるでしょ？」

母さんは三つほど離れた先にある墓に顔を向けて言った。確かに同じ紋のようだ。他の墓をよくよく見てみると、いくつかその『丸に違ひ矢』を見つけることが出来た。

「ふーん。珍しいって訳でもないんだね……なんかつまんないなー」

弥生子は感心しつつも不満そうに呟く。確かにその気持ちも分からぬくない気がする。

「そんなこと言うもんじやないわよ。確かによくある家紋だし、謂われもよく分からぬいけどね。死んだ父さんなら何か知つてたかもね。

前に父さんから聞いたことあるんだけど、『黒沢』は元々『平家』の出らしいんだけど、その家紋は『馬』をモチーフにしたものだつたって言つてた。

でも、本家から分家へ移つていいくつも、いつの間にか我が家では『矢』をモチーフの家紋になつていつたらしいのよね。

あんた達のおじいちゃんが若い頃は『丸に違ひ矢』じゃなくて、単なる『違ひ矢』だつたらしいのよ。なんで『丸』がついたのかはよく分かんないけどね」

母さんは「暑いわね」と日傘を取り出した。母さんは何かする度に何か言う。これは完全にクセだ。いちいち反応していたらキリがないことくらい俺も弥生子も承知だ。

弥生子は「『平家』とかす』——」とはしゃいだが、すぐにそれを母さんが制した。

「別に直径の家柄でもないし、今の私たちの生活に何の関係もないでしょ？ 今は今。昔は昔よ」

俺は黙つて聞いていた。少しでも自分のルーツが知れた気がして、なんだか嬉しい気分になつたような。いずれ俺も自分の子供にうちの家紋『丸に違ひ矢』を継承させるのか、と思うと少し幸せな気持ちになれた。なんでなのかは分からない。

「ま、母さんも聞いただけの話で家紋のことなんて全然分からぬけどね」

母さんは少し笑いながら言つたが、墓を見つめるその目に表情は無かつた。

「あ、そうそう。アーチー、ちと聞きたいんだけどさ、『オトノナイセカイ』の噂聞いたことある? アタシのダチのアヤ知つてるでしょ? あの子がその噂にハマつてゐるみたいなんだよね。アタシもまだ詳しいこと聞いてないから良く分かんないんだけど」

墓参りを済ませ、そろそろ帰るうとしたとき、弥生子は突拍子もないことを聞いてきた。

当然俺はそんなことを知る訳もなく、「知らん」と一言返事した。「んじやいいや」と弥生子は言つた。一瞬、寒気にも似た違和感を感じた気がしたが氣のせいだらう。

「ちょっと俺先に帰るわ」

俺は母さんにそう告げた。

「分かつた。来年は良い報告を父さんにする」とが出来ると良いわね。それが父さんに出来る唯一のことよ

分かつてるよと、俺は母さんに言い、一人とは別に一人で來ていた俺は先に帰ることにした。

アーチー! と帰ろうとする俺に「レイさんによろしく」と弥生子が笑いながら言つた。

俺は原付、母さんと弥生子は車で來ていた。流石にここまで原付で來るのは骨が折れた。帰りもあの長い道を原付で帰るのかと思うと少し憂鬱だ。

今日は墓参りの為に上司に無理を言つて有給を取らせて貰つた。墓参りはほぼ午前中で終わるため、昼から会わないとレイを誘つたのだ。今日の墓参りも一緒に行くかと誘つたが、「来年は一緒に行きたいね」と断つてきた。それは来年一人が入籍することを

示す現れでもあることは俺にもよく分かつていた。

レイは大学へ講義に行くと言つていたが、午前中で終わるので、昼から落ち合おうと約束していた。たまには映画でも行くか？ と誘つたが、買いたいものがあるのと、言われた。

寺のお粗末な駐車場に駐めていた原付に跨つた時、ふいに携帯が鳴つた。それはレイからの電話だった。

「トウヤ」めん。今日無理になつたよ

アヤからのメールは実に不可解なものであった。

『オトノナイセカイのウワサ知ってる?』

見た瞬間から、いや正確にはもう少し前からだが、あまりいい気がしない。

そもそも私は噂話が好きじゃない。噂話のほとんどは本当にただのウワサだし、信憑性のある話自体存在しないに等しい。

なんでアヤは「ウワサ」が好きなんだろう? いつも思う。アヤだけじゃない。自分の周りの連中だって「ウワサ」が好きなヤツが多い。なんで何の信憑性も無い話題で盛り上がるのだろうか。アタシには理解出来ない。

ふと時間を確認すると十一時を回つて日付が変わっていた。とりあえずアタシはアヤに返信することにした。なんて返信しようか散々悩んだあげく、普通に返すことなどが一番いいと思った。

『知らないヨ? それがどつたの?』

しかしそれからアヤからの返信は無かつた。

かれこれ1時頃まで待つたが流石にこっちも眠くなつたので寝ることにした。どっちにしても明日も補習だ。アヤも来るだろうしこっちから聞かなくても「ウワサ好き」のアヤのことだから聞かなくとも言つてくるだろう。

急激な眠気がアタシを襲う。気づけばアタシは深い眠りに落ちていた。

不思議な夢を見た気がする。そこがどこなのか全く分からぬ。

『オトノナイセカイに関わっては……駄目……』

誰かが言った気がする。

『オトノナ……イセ……カ……イに……ふれる……た……めに

.....は.....』

違う誰かが言つ。

『モウマニアワナイ.....』

得体の知れない何かを感じた。女性と思われる影を見たような気がした。

八月七日。夏期補習最終日。  
この日、アヤは来なかつた。メールしても電話しても出なかつた。

補習が終わつた昼下がり。帰り道にアヤの家に寄つてみたが人の気配は無かつた。もちろん誰も出ない。

流石に心配だ。何かあつたのだろうか。ムカツクけどやっぱアヤはトモダチなんだ。なんだかんだ言つてもいつも一緒にいるのはアヤだつた。つまらない話が多いといつも思つてゐるだけで、アタシはひょつとしたら自分から他人を遠ざけてゐるのかも知れない。

なんでもないことなのかも知れない。アタシはメールに、ケータイだけに依存してゐる訳じやないんだ。人に依存してゐるのかも知れない。寂しいのは嫌だ.....。

結局、夜になつても連絡がつかなかつた。

ブーブーブーブーブーブー.....。

日付が変わつた深夜、突然携帯が鳴つた。「アヤであつて欲しい」と氣づけばアタシは祈つてゐた。恐る恐る携帯を開く。ホッと胸をなで下ろす。安堵感で少し気が抜けた。それはアヤからのメールだつた。アタシは急いで内容を見ることにした。

『ごつめ～～ん！ 昨日は寝ちゃつたつつ w あはは m (。・

。。) m』

呆れた。なんてこつた。アタシは心配はなんだつたのか。この

女はふざけているのか？

『ちょっと！ 補習にも来なかつたし、帰りには家まで行つたんだよー？』

『流石にむかついたがアタシは返信した。すぐに返信が届く。『絵文字も顔文字もないとか、怖いって。『めんつて言つてんじやん~（、・\*）』』

この態度にはかなりムカツク。心配してマジで損した。こんなヤツがトモダチとかあり得ない。少しでも「トモダチ」だと思つた自分が愚かに思え、縁を切つてもいい気がした。

『心配して損したよ』

それだけ返信するとベッドに潜り込んだ。

ブーブーブーブーブーブー…………。

携帯が鳴つていて。しかしアタシは無視することにした。あーうるさいうるさい！ 携帯の電源を切り、ベッドの上に寝転がつた。そして気づけばアタシは眠つてしまつていた。

八月八日。

今日はアタシが小さい頃に死んじつたお父さんの命日だ。お母さんとアニキと二人で例年通り墓参りへ朝から行つて夕方には帰つてきた。

アニキは彼女のレイさんと会つと言つてた。母さんは買い物に出かけた。アタシは独りぼっち……。しかし家に戻るとレイさんはレイさんと出かけてるはずのアニキが家にいた。

「あれ？ レイさんは？」

「ああ、なんか急用が出来たみたいで結局会つてないんだ。だから今まで暇つぶしにテレビ見てたよ」

リビングのソファーで覗きながらテレビを見るアニキは気まず

そうに笑つた。

アタシは「そつか。残念だったねw」と少しアニキを茶化して

自分の部屋に戻った。

部屋に入つて思い出した。携帯を持つて行くのを忘れていた。いわゆるアタシみたいなイマドキの女子高生が携帯を持つて行くのを忘れてるとか、かなりどうかしてゐる。

そして携帯の電源を切っていたのを思い出し、電源を急いで入  
れた。

電源が入り、携帯の画面に「welcome」の文字が表示される。そして「着信拒否が設定されています」と出る。ワン切り業者やウザイ男の電話番号を何件分か登録しているためだ。

待受画面になると、コカともう一人仲の良いトモダチの三人と一緒に撮った写メが写る。アヤの顔を見るとむかついてくる。もう待受も別のものに変えようと思った。

すると「受信中」の文字が画面に出た。その数は「12件」。嫌な予感がした。見てみるともちろんそれはアヤからの大量のメール。

その数は本当に気持ちが悪いくらいに多い。すぐに削除しようとしたが、念のために中を古い順から見ていくことにした。

思はず口に叶へしまひ。

『8／7（木）23：35：ちゅうどパン屋へ！返信してよー』  
『8／7（木）23：42：「冗談だよねえ？ ヤハちゃん。怒らな  
いでよ？」（つ・）』  
『8／7（木）23：56：マジで怒らせかけたのかな…』  
『8／7（木）23：59：「冗談抜きで本当にじめー』  
『8／8（金）00：07：起きたらすでに腹でえ 謹めてわいり  
寝ちゃったの そしたら親が一緒に外出しそうってこいつから  
せば

『8／8（金）00・15・ケータイの充電忘れてて…』

『8～8（金）00・20・15なん時にも15時までのせ  
違ひでると懲りたび… 並わせて』

『言わせて』  
… 違つてると思ひがち

8/8(金) 00:22:昨日壇山さんとなんとかの会話

『8／8（金）00・25・ウワサつて言つてもまだほとんどの人が知らないと思つ』

『れいし・おれおれ・・・・・』

おーく@おーく おーく@あおきゆうけい@おーく おーく@おーく  
ほーじゅみーる@4940hkt@助けて

「イー」。脳裏にフラッシュバックする。夢の中で見た「オトノナイセカ

「誘3」 第参話・畏怖嫌厭（いふけんえん）

レイとの約束が無くなつた冬哉は結局家に帰り、暇を持て余すこととなつた。

一人で買い物や映画を見る」とも考えたが、テンションが少々下がつたため、一人での行動はやめることにした。

無駄な時間だとは思いつつも、帰宅した冬哉は一階のリビングのテレビを付けた。せっかくの有給が水の泡だなと思いながらもつまらない番組を見る。

しばらくすると弥生子が帰ってきた。母さんは買い物に出かけたそうだ。

あまりにも退屈さに急激な眠気が襲つてくる。思わずウトウトしたその時のことだった。

「いやあああああああ！」

一階の弥生子の部屋から叫び声が聞こえた。あまりにも突然の出来事に一瞬訳が分からず戸惑つたが、一気に眠気は飛び、冬哉は足早に弥生子の部屋に向かつた。

そこには危険が潜んでいるかも知れない、不審者が侵入しているかも知れない。そんな可能性のことを考える必要はなかつた。「妹に何かあつた」それだけで冬哉の体は自然に動く。

幸いドアに鍵はかかっていないようだ。

危険な雰囲気はしない。軽くノックをするが返事はない。さきほどの叫び声以来何も音がしない。静寂に包まれている。その静寂が一瞬嫌な想像をしてしまう。想像より行動だ、と自分に言い聞かす。

「すまん。勝手に入るぞ」

ドアに手をかけ、断りの一言と共に、冬哉は弥生子の部屋のドアを勢いよく開けた。

するとそこにはベッドの上で頭を抱え、涙を流し、顔が引きつた表情を浮かべる弥生子の姿があつた。突発的なパニックのようにも見える。幸い不審者の姿もなく、部屋が荒らされた様子もない。

「弥生子……。大丈夫か？ 分かるか？ 僕が分かるか？」

酷く怯えてるようだ。冬哉は出来るだけ警戒されないよう注意しながら優しく声をかけた。弥生子は小刻みに震え泣いている。目の焦点は合っていない。

『気づけば何かぶつぶつと呴いているが、何を言っているか聞き取りづらい。』

「オトノナイセカイ……オトノナイセカイ……オトノナイセカイ……」

…

何を言っているのか聞き取れたとき、冬哉は悪寒を感じた。弥生子は何かに取り憑かれてしまったのだろうか。しかし

そのような雰囲気ではない。精神的に混乱してるようにみえた。

冬哉は弥生子を包み込むように抱きしめ落ち着かせようと試みた。それは凄く長い時間のように思えた。

数分後、なんとか弥生子は落ち着きを取り戻したようだ。

「どうした？ 何があつた？」

弥生子はそれでもまだ酷く怯えてるようだつた。

冬哉は出来るだけ柔らかな口調で聞いてみたが、なかなか最初の一 口が出ないようだ。少し待つたところで弥生子は口を開いた。

「ヤバイよ……アタシ、オトノナイセカイに引き寄せられてる……みたい……」

弥生子が言っている意味がよく分からなかつた。

冬哉は首をかしげる。それに気づいた弥生子は落ち着きを取り戻し始めたのかゆつくりと話し始めた。

「今日、墓参りの時、アニキに聞いたでしょ？ ウワサのこと『やはりそれか』。『オトノナイセカイ』やはりこれが関わっている。

とにかくここは黙つて聞くことに専念するべきだ、と冬哉は考えるが、嫌な予感や不安な感覚が襲つてくる。何か危険な気がする。本能がそう訴えてくるような感覚。何故かその場から逃げ出したくなつた。

なるほど……弥生子が怯える理由は”これ”か……。しかし聞かねばならない。

「アタシにも『ウワサ』がなんのか分かんない……。でもアヤが巻き込まれてる。アタシに助けを求めてる……」

弥生子の目から涙がこぼれる。どうしたことだ？　しかし話が見えてこない。

「これ、見て。アヤからのメール……」

涙を拭いながら弥生子は自分の携帯を開け、冬哉に見せた。携帯を受け取つた冬哉は順番にメールを見た。

なんだ？　この異常なメールは。気持ちが悪い。吐き気が襲うようなその内容。生理的に何か嫌な感覚が冬哉を襲つ。これは一体。

「文字化けしてるな……。こんなこと言つのはおかしいかも知れんが……オカルト的というか、ホラー的などといつか……何か靈的なものを感じるのは気のせいか？」

冬哉は口に出すまいとしたが、ここはあえて言つべきだと考えた。こんなメール普通ならあり得ない。「そうかも知れない……」  
弥生子は呟くように言つた。

親父はどうだつたか知らないが、俺たち家族にはいわゆる「靈感」のようなものがある。言葉では説明のしようが無いが、それはあくまで微弱なもので感覚的なものだ。「ここに何かがいると感じることがある」という程度の力。

靈感の強い者に言わせてみれば、「普通の人より少しだけ敏感」という程度で、むしろ靈に取り憑かれやすい体質（？）らしい。その体質のせいだから今まで分からぬが、何か「靈的」な違和感を感じる。どうやら弥生子もそれを感じ取つてゐるようだ。

「アニキ……ヤバイよ……さっきとんでもない『力』みたいなのを感じた……これは絶対に『ウワサ』が絡んでるとしか思えないよ……。もうアヤは駄目かも知れない……」

確かに今までに感じたことの無い大きな何かを感じた。弥生子は喪失感や絶望に囚われそうになつてゐる。

俺たちのような微弱な力でも感じるという最早「知りもしないウワサ」から逃れられない、そんな気がした。

数分、いや数十分の時が流れたのかも知れない。冬哉は考えた末、一つの答えを出した。

「ユースケに会つてくる。アイツなら何か分かるかも知れない」

冬哉は友人であるユースケの存在を思い出していた。彼ならひょつとしたら何か知つてゐるかも知れない。いや、何か解決策を見いだしてくれるかも知れない。

「え？ ユースケさんて、あの医大生の？」

少しずつ落ち着きを取り戻し始めた弥生子はきょとんとした顔付きで不思議そうに言う。

「そうだ。アイツはオカルトとかホラーの話が好きでな。その手の話には詳しいんだ」

池永裕介。コイツとは高校以来の友人だ。

医者の息子で本人も医者を目指し今は医学生をやつてゐる。靈感は特にないが、オカルトやホラーが大好きでその趣味のほとんどがその手のものだ。また博識でなんでも知つてゐる。俺の良き親友であり、知恵袋もある。

万が一の可能性だが、ひょつとしたらその「ウワサ」についても何か知つてゐるかも知れない。淡い期待には変わりないが、他に誰も頼る相手がないだけにユースケの存在は非常に助かる。

冬哉は携帯でユースケに連絡を取つた。

話の内容は話さなかつたが、幸いユースケは暇を持て余していたらしく、「急用」であることを伝えるとすぐに会えることになつ

た。そして双方の距離から近い「アミレス」で会うことに決め、すぐにお互い家を出ることに決まった。

「私も行く」

弥生子の申し出を断る理由はなかった。俺が伝えるより、当事者の弥生子もいた方がいい。と冬哉は判断した。

「分かった。今すぐ出るから用意しろ」

どうやら母の明美は車を使わずに買い物に出かけたようだ。冬哉は車に乗り込みエンジンをかける。弥生子は助手席に座るが何も話さない。不安で仕方がないのだ。

結局一人はファミレスに着くまで一言も言葉を交わさないままだった。

すでに日は暮れ、時計の針は七時を示していた。  
ファミレスに入ると、まだ来てないのかと冬哉は周囲を見渡す  
が、コースケの姿が見えない。

店員に人数を聞かれる。煙草を吸うかと聞かれたので「吸う」と答える。すると「奥の空いてる席へどうぞ」と言われその席に向かう。入り口からでは敷居で見えなかつたが、一番奥にある窓際の席に携帯電話をいじつているコースケの姿を見つけることができた。店員に断り、冬哉と弥生子はコースケの元へ向かつた。

コースケもこちらの姿を確認すると「よつ」と手を挙げた。  
相変わらず背が高い。百八センチの長身。冬哉と比べるとかなり差がある。立ち話すると首が疲れるくらいだ。

「急にすまんな」

コースケと向かい合わせになる形で冬哉と弥生子は座つた。

「ああ、気にするな。こつちは『狩り』してただけだしなつ」と笑いながら携帯を閉じコースケは言つ。

「狩り」とは今流行つている携帯型ゲーム機のソフトのことだ。いわゆるモンスターを狩るだけのゲームだが、そのゲームの奥深さと多人数で大型のモンスターを狩るというゲーム性が受けて凄く売れている。冬哉も時々一緒にやるがコースケほどハマつちやいない。すでにコースケは注文を済ませていた。とはいえたドリンクバーの「コーヒーだけのようだ。冬哉と弥生子もそれに倣う訳ではないが同じくドリンクバーを頼み、冬哉はコーヒー、弥生子は紅茶を入れた。

「また『狩り』やつてたのかよつて、相変わらず好きだな  
冬哉は少し呆れ気味で言つた。

「まーな。それで急用つてのはどうしたんだよ？ ヤエちゃんもい  
るし電話の雰囲気からもただ事じやない気がしたんだが？ あ、ヤ

エちゃんこんちわっ

コースケは普段はおちゃらけた感じの人柄だ。口数も多く割と八方美人なタイプである。しかし今は冬哉と弥生子の様子が「いつも違う」ことを感じ取っていた。

「お久しぶりです」

弥生子の霸氣の無い返事にコースケの表情が曇る。

「これはただ事ではない。そう思つたのであるうか、コースケは真剣な顔つきで一人の様子を観察した。少しの沈黙が場を包み込むが、それを苦にするほどのことでは無いとコースケはその場を見守つていた。そして冬哉が口を開き、ことの成り行きを話した。

「なるほどな。悪いけどヤエちゃん。そのメール見せてもらえるかな？」

弥生子は「あ、はい」と素直にアヤのメールを開き、コースケに渡した。

コースケが信用できることを弥生子も知っている。ましてや今の状況ではコースケしか頼りに出来る者がいないのだ。携帯を見せることに躊躇する必要なんてどこにもない。

真剣な顔つきでコースケはメールを確認している。しかし意外と早く全てを見終わると、安堵の表情を浮かべた。むしろ少し笑みをこぼすかのようでもあった。その表情に冬哉は呆気にとられそうになり、一言文句を言おうとしたが、

「ヤエちゃん、安心して良いよ。少なくともアヤちゃんは大丈夫だ。無事だよ」

と、コースケは意外なことを言つた。その答えに一人はもう驚きを隠せなかつた。

「え？ ホントに？ っていうかなんで？ なんで大丈夫って分るんですか？」

もちろんそのことに一番驚いたのは弥生子だった。

冬哉にしてもコースケの言つことの意味が全く分からず困惑す

る。それは自分がそのメールを見たときとあまりにもギャップがあつたからだ。その雰囲気からやはり「靈的」なものは感じていよいよだ。それもあってのことなのであつ。

そしてコースケは語り始めた。

「まず文字化けの部分だけ……。文字化けなんかじゃないよ。これは単なるランダムな文字列だ」

「どういうことだ?」

冬哉は煙草を取り出し、火を付けながら聞いた。弥生子は訳が分からぬという顔で啞然としている。

「文字化けにはある種の法則みたいなのがあるんだが……。これはその文字化け特有のものじゃない。完全にランダムだ。恐らく日本語入力の状態でキーボードを適当に叩いたような感じだな。うん、間違いない。つまりだ、いいか?」

なるほど、そう言われてみれば確かにそうかも知れない。

冬哉も文字化けの経験は何度もあるが、確かにあの文字化けは何か不自然さがあった。あのメールを見たときは冬哉自身も混乱していた。その不自然さに気が回らなくて当然と言えるのかも知れない。しかしだからと言つてあの時に感じた「靈的」な違和感に説明がつくはずがない。弥生子も感じた訳だし、あの覚え方は異常と言つてもいいだろう。

そして「ああ、続けてくれ」と冬哉は答える。弥生子も無言でコクリと頷く。

「恐らくだが、これは携帯で打つたものじゃないだろう。パソコンで打つたものを転送してヤエちゃんにメールしたんだろうな。あんな文字化けを自演するには携帯では骨が折れるよ。つまりこれは『故意的』な意志のあるメールということだよ。ヤエちゃんにこんなこと言つのははつきり言つて忍びないんだけど、あまりにも作為的で、俺には悪意にも感じられるよ」

弥生子は複雑そうな思いでこれに耐えた。アヤが無事だつたことは嬉しい。でも何かそこに「意図」があることが見えたことがシ

ヨックだつた。

コースケが言つにほ「悪意」を感じるといつ。弥生子にはそこまでのことは分からぬが、これは「裏切り」以上のことに思えてきた。アタシを陥れる何かの「罠」。そう思えてくると弥生子に怒りが込み上げてくる。

しかし弥生子からそれを感じたコースケは再び口を開いた。

「おつと。ヤエちゃん。結論を出すにはまだ早いぜ？ そもそもこれをアヤちゃんが打つたって証拠が何処にある？ ま、そうなると無事であるという保証が無くなつてくるけど……」

重い空気が場を取り巻く。誰も口を開けなかつた。結局結論が出来ない。沈黙を打ち破つたのは弥生子だつた。

「とにかく私は一度アヤと会つて話してみるよ……返信もまだしてないし……」

弥生子にとつてこれほど辛いことは無いのかも知れない。アヤを信じればいいのかどうかすら分からなくなつていてるのであつ。しかし状況からして危険かどうかまではよく分からぬが、確かに会つてみるべきだ。メールや電話だけではその真意は見えないだろう。

「それしかないな……でも弥生子だけで会つのは危険な氣もするが大丈夫か？」

冬哉はそれが心配だつた。

「会つ」 という行為が必要なことは分かる。もしそれが「罠」だつたとしたら？ 「第三者」の存在があるとするならば？ それに「靈的」な問題もある。これは下手に動かない方が良いのかも知れない。

アヤは無言で首を振つた。不安で仕方ない、それは当たり前のことだつた。

「しかし……『ウワサ』って何のことだらうな。何にしてもこの『ウワサ』が関わつてゐる氣がするよな」

冬哉はしきりに煙草を吸いながら呟く。そして「吸うか？」と

ゴースケに勧めるが「やめたらしいよ」と答えた。

そもそも「ウワサ」についての情報が皆無だ。冬哉も弥生子から聞くまではその存在自体もちろん知らなかつた。そしてその「ウワサ」自体がなんのかも分からぬ状況。

今回の「」の一件、本当にその「ウワサ」が関わつてゐるのであらうか。それすら冬哉たちは分からぬのだ。

「『オトノナイセカイ』か……」  
ユースケが呟いた。

本の一瞬だがその瞬間、何か不気味な違和感がこの場を支配した。それは言葉にならない異様な空気が包み込むかのようだ。しかしそれを感じたのは冬哉と弥生子だけでユースケは何も感じ取れていなかつた。

ひょつとすると……と冬哉は考えるが確証を得ないことであつたので、とりあえずこの場ではそのことを考えるのをやめた。

「うん。やっぱりその『ウワサ』が問題だと思つ」

弥生子は今感じた違和感には触れずに言つた。冬哉もまたそれを汲んで黙つて頷く。

ユースケも同調するように頷き、「ちよつと長い話になるけどいいか?」と一言断つてから話を始めた。

「やはりキーワードは『ウワサ』だな。いいか?『FOAF』を知つてるか?」

二人は首を振つた。ユースケはコーヒーを一口飲み話を続けた。

「『都市伝説』は知つてるよな?」

と、ユースケは二人に聞く。

「『都市伝説』ってアレだろ?『口避け女』とか『人面犬』とか『トイレの花子さん』とかそういうヤツだよな?」

冬哉はもちろん知つてるとばかりに答えた。

弥生子は何か別の考えに浸つてているようだ。「ウワサ」のことはもちろん気になるが、それ以上にアヤの安否が気になるのである。

「ああ、そうだ。簡単に説明させまひつが、『FOAF』つてのは『Friend Of A Friend』の略語のことだ。『友達の友達』という意味で、本来はRDFとかXMLを使って人々に

関する情報、つまりメタデータとその繋がりを公開、共有するための半ば実用的、半ば実験的なプロジェクトなんだ。これを使ってマシンにも扱える自己紹介を記述したり、人や組織、関心領域のネットワーク情報をエージェントに処理させるといった応用が…

ここまで聞いた冬哉は話を制し言つた。

「すまん。何のことだかよく分からん」

「ちょっと話の論点がズレてきたな……こっちこそすまん。早い話がウェブログ、つまりブログみたいなもんだよ」

冬哉も弥生子もそれなら分かると納得した。そしてユースケは話を続けた。

「つまりだな、『FOAF』つてのは、これはさつき言つた『都市伝説』の事を差した言葉としても使われんだよね。『友達の友達から聞いた話』これが都市伝説が語られる形の基本パターンなんだ。つまり聞き手が知らない者からの情報で、出元が基本的に確認が出来ない。話し手は聞き手に対して話を飛躍をする。話の性質上、少しでも面白くする方が効果的なんだな。真実味と不安とを加えるため、登場人物や地名には話し手や聞き手に取つて身近なものが選ばれることが多い。身近な人に起こつた真実として語られたり、『新聞に載つていた話』として紹介されたりする。こうして都市伝説は成長していく」

ユースケの話は続く。気づけば弥生子も食い入るように話を聞いていた。冬哉は煙草の本数をどんどん増やす。

「人はなかなか正確に話を伝える事が出来ない。理由はいくつか存在するんだけど、今は関係無いし省くな？まあ、人は少しでも話を面白くしてしまう傾向にあるんだよ。今のように情報伝達手段が少ない昔は主に口頭伝達が基本だつた訳だよな。でも「話の飛躍」がどうしても絡むから曖昧さが出てくる。民話やお伽噺（おとぎ話）みたいなのはこのFOAFの一つの形である可能性が高い。よくあるパターンの『昔々あるところに…』なんてかなり曖昧だよな？民間伝承なんてそんなもんだよ」

そりや そうだと冬哉は苦笑する。弥生子もくすりと笑う。

どうやら弥生子は落ち着きを取り戻してきたようだ。コースケは話にのってきている。やはりコイツと相談して良かつた、と冬哉は思った。

「つまり『曖昧な話』というものは、出所が不明な事が多く、正体を掴みきれないものが多い。話が伝染して行くプロセスで変化を遂げたとか、または始めから『作り話』つていう可能性がある訳だ」

コースケは一通り話すと再びコーヒーに口をつけた。

「つまり……『オトノナイセカイはアヤの作り話』つてこと……？」

弥生子は居ても立つてもいられず、叫び声にも似た大きな声で言った。

周囲の反応で自分の行動の羞恥に気づくと少し顔を赤らめ、紅茶を一口飲んで落ち着こうとした。

コースケは「いや、その線はない」ときつぱりと言った。

冬哉も弥生子も話の流れが分からなくなってきた。二人ともコースケの話をもう一度頭の中で整理するが、よけいに頭が混乱してきた。そして「実はな……」とコースケは真剣な眼差しを冬哉に向ける。

「トウヤ……。『ヒサ』を覚えてるか？」

唐突の質問に一瞬冬哉は思い出せなかつたが、徐々にその存在を思い出した。

高校の頃の同級生だ。田中久司。そんなによく連んでいた訳では無かつたが、同じクラスの中ではよく話していたように記憶がある。コースケと一緒に三人でよく休み時間に話したもんだ。

「ああ、覚えてるよ。『タナキュー』とか『キューちゃん』とか言ってよくからかつてたな。ヒサと今でも連絡取つてんのか？ 元気か？」

冬哉は高校の頃に懐古した。気づけばもう五年以上も前のことなんだな。あの頃は早く社会に出たくて仕方が無かつたが、今思えばあの頃が一番楽しかつた気がする。久々に聞いた同級生の話。そ

れだけで何故か嬉しくなる。

「実は……。そのヒサから『オトノナイセカイ』についての噂で相談を受けてるんだ」

コースケの発言には驚かされた。まさかすでに関わっていたとは。

オマケにそれがヒサからの相談。しかしこれが噂話、都市伝説の部類である以上、知ってる者がいて当然だ。

うつかりこの三人しか知らないもののような錯覚をしていた。つまり弥生子の想像した「作り話説」の線は消えたということだ。コースケが否定した理由の謎についてはこれで解けた。

「その内容だが……。ヒサがその噂を聞いたのは会社の同僚だったらしい。ヤツは今パチンコ屋で社員やつてるらしいんだが、その同僚も客に聞いたらしいんだ」

「出元は分からぬことか。さつき言つた『都市伝説』の典型ということか……」

冬哉は横やりになることを承知で言つた。

自分に関わりのある人間が「ウワサ」に関わってきてる。ここまで来れば自分も十分に関わっていることは百も承知だ。そしてコースケの反応を待つた。弥生子は二人のやりとりと会話を聞くだけしか出来ない状況に少しの安堵感を得ていた。自分は独りじゃない。アニキやコースケさんがいる。アタシも自分なりに頑張らなければ。

「そういうことだな。肝心なその「噂」だが、ヒサが「うにはこんな感じだ」

コースケはヒサから聞いたという噂を淡々と話し始めた。

夢の中で黒髪の長い女が誘う。

その女に狙われると逃れられない。

女は言つ、「あなたの血液型を教えて」と。

そして答えるとその血液型が何であれ、「あなたとは相性がない」と言い、「オトノナイセカイ」に連れて行かれる。

「ヒサが言った「噂」。こんな感じだったよ」

ユースケは言った。しかしその表情は不思議だった。

冬哉や弥生子にしてみれば今聞いた話はとんでもない話だ。いわゆる怖い話が苦手な弥生子は恐怖に顔を強張らせている。

冬哉にしても少し寒気を感じるような感覚を持った。しかしユースケはそのような様子もなく、それは「オカルト好き」であるからという理由には見えなかつた。

「鎮1」 第壱話・手記1

「鎖1」 手記1

十一月十一日

「一」が四つ並んだその日、彼は亡くなつた。  
中村弘昭。二十六歳だつた。

彼は何か「噂」の調査をしていたようだ。その彼が亡くなる前に残した言葉がある。

「僕の推測が当たつているなら、明日、僕は死ぬかも知れない」

何故、彼は死ななければならなかつたのか？ 何故、彼は死を予感出来たのか。

その謎は彼の残した手記にあるように思える。

これは生前に彼が調査した手記である。彼のパソコンにその調査報告のテキストが見つかった。原文そのままでご覧頂きたい。

\*\*\*\*\*

調査報告1

これは噂に関する調査報告である。  
あくまで分かったことを随時記述していくものである。

## 【噂】

噂とは根本的に出元が分からないことが多いといふ。

いわゆる「都市伝説」と捉えても差し支えないようである。

都市伝説のその特性は別途資料を用意したのでそちらに目を通して頂きたい。根本的にこの報告書は「噂」の報告であり、都市伝説の特異性を考察するものではない。

都市伝説については下記のURLを参照。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%83%BD%E5%B8%82%E4%BC%9D%E8%A%A%C>

### 【本調査について】

本調査報告の要である「オトノナイセカイ」についての記述をしておきたい。

私はとある人物から依頼することになったが、その依頼とは奇妙なものである。

「噂」の調査をしてもらいたいといつものだ。未だかつて噂を調査したことは無い。

まだ多くに広まっているのではないはあるが、「オトノナイセカイ」という噂。依頼者によるその噂に関する情報入手の経路については不明である。

何の手がかりも無い状況からの調査であり、それが噂であるため、調査はかなり難航を極めることである。

なお、調査内容は噂の詳細を調べるものではなく、噂の正体を調べるものとする。

## 【オトノナイセカイ】

様々な文献（都心伝説、民間伝承など）に田を通したが、それらしきものは見あたらず。もちろん挿い摘んだ調査のため見落との可能性はある。

「オトノナイセカイ」とは「音の無い世界」であるとは思われるが、その確証は得られない。仮に「音の無い世界」とすれば、そこから想像すると難聴者を指すのではないだろうかと考えるが、「噂」の特性に焦点をあてるとその線はなさそうである。

これは難しく考える必要性は無く、単純に「死」を意味しているものと考へるべきだと思われる。

独自の調査（この調査報告については後田記載予定）により、噂を知ることが出来た。その報告は後に記載しておく。

その内容に気になる言葉が含まれてこる。それはこの調査のキーワードとなるのではないだろうか。

「夢」「黒髪の長い女」「血液型」

少なくともこの3つがキーワードとなるのではないだろうか。噂の内容はかなり理不尽なものである。「黒髪の女に夢の中で出会ひと死ぬ」ということなのである。

現在の調査では噂の存在は確認されているが、この噂に関わった者が死亡するという調査結果は無い。もちろん調査を開始して日が浅いため、その点も不明確ではある。

「靈的」なものであるとも言われているようではあるが、非科学的要素が強いため、噂の恐怖を増長させるための尾ひれのようなものであると思われる。

都市伝説の部類であるとするならば、その内容に人物名や土地

タクが出てくることがある。しかしそれも見あたらない。

この噂には都市伝説である特徴が欠落しているよう思えて仕方が無い。

「夢」：どうこう条件で見るものであるかは不明である。

「黒髪の長い女」：髪が長いのか女が長いのか不明である。表現に問題があるのでないだろうか。

「血液型」：これは所謂「血液型占い」と呼ばれるものであろう。科学的根拠の無いものである。

上記の3点を考察すると見えてくることがある。

この噂は証然としない。言つなれば取つて付けたような内容である。創作されたものに違いがないように思われる。

現時点では依頼者に報告するにしては些か不十分な情報である。情報が少ない今だからこそ出所を特定しやすいことには変わりないであろう。調査は迅速に行つ必要性がある。

### 【噂報告】

噂の内容をつこに知ることが出来た。それを記載しておぐ。

『夢の中で黒髪の長い女が誘う。その女に狙われると連れられない。

女は言つ、「あなたの血液型を教えて」と。そして答えるとその血液型が何であれ、「あなたとは相性が合わない」と言つ、「オトノナイセカイ」に連れて行かれる』

作成日：2008/08/09

「オトノナイセカイ」？ なんだそれは。その書き込みの後を追つても特にそれに対するレスもない。完全にスルーされている。

俺もこのままスルーすべきなのだろう。しかし何故か気に入る。何度もチェックするがその後「オトノナイセカイ」に関するレスはない。

かといって、自分がレスして聞く訳にもいかない。この場ではそんな空氣ではない。ここはあくまでもニュースに関する話題以外は基本的にスルーだ。

そもそも本当にあの「99」の書き込みの言つようこそ、「富下事件」と「オトノナイセカイ」に因果関係はあるのだろうか。

いや、問題はそこじゃないのか？ 「オトノナイセカイ」自体の意味が分からぬ。この掲示板によくいる電波系の書き込み。普通ならそれで終わるはずなのだ。しかし気になつて仕方がない。何故俺はこんな書き込みに興味を持つているのだろう。

検索……。やつてみるか。

検索サイトで「オトノナイセカイ」で検索してみる。

特に目立つたサイトは見つからない。主に創作系のサイトが目立つ。「詩」や「歌詞」がほとんどだ。いくつかのサイトを試しにクリックして飛んでみたが、やはり「詩」がほとんどで特に気に入るような情報は何もない。

いきなり足踏みのようだ。そもそも便所の落書きと称されるあの掲示板の書き込みを信じた俺がバカだつたのだろうか。

不意に目眩がした。まるで何かノイズのような目眩。そういうば随分寝てない気がする。そう考えると体が凄く重くなつてきた。今何時だろう。

時計はどこだ？

部屋を見渡すが部屋が暗いので分かりづらい。部屋での明かりがモニターの出す淡い光のみの状況ではちょっと探すのが困難だ。

あの小さな置き時計なんてこの状況で探せる訳がない。だからといって、部屋の照明をつけてまで探す氣にもなれない。

携帯にしてもこの散らかった部屋のどこにあるのかすら分からぬ。携帯を探す行為も置き時計を探す行為と同じく、俺にとつては無駄だ、と思う。

諦めた俺はパソコンのモニターの右端の時計の存在を思い出した。

タスクバーの一一番端に時計がある。初期設定のまま。これが一番俺には使いやすいんだ。時間を確認するとすでに朝の11時を示していた。

確かに起きたのが昨日の朝5時頃だった気がする。ただ、昼から夕方まで記憶が途切れている。あ、そうか。一時的にでも寝てしまつたんだった。テレビも付けっぱなしで、起きたら18時から始まるアニメがやっていたことを思い出した。約17時間か……。もつと……24時間まるまる起きてたような気がしたがそうでもないか。腹も減った。しかし食欲がある訳でもない。体が重くて食べる氣にもなれない。

少し横になりたい。そう思い、ベッドに体を倒した。寝転がりパソコンのモニターで少しだけ見える天井をぼんやり眺めてると眠気がやってくる。

「もう少し検索したいんだけどな」

やはり気になる。とはいって、気力が出てこない。今はこのまま寝てしまいたい……。

ジジジッ

『オトノナイセカイに関わるな』

ノイズと共に何か聞こえた気がしたが、もうすでにどうでもよ

くなっていた。

「冷たい……」

もの凄い量の寝汗での嫌な目覚め。なにやら頭痛もする。若干まだ体も重いが、さつきと比べるとかなりマシなようだ。腹減ったな。

よくよく考えてみれば、丸一日何も食べていない。一階に降りて台所で何か探そうかとも思ったが、お袋がいると面倒くさいことになる。恐らく晩飯も置いてあるだろうが、家のメシを食べる気になれない。

そう言えば、昨日だったか一昨日だったか忘れたがコンビニで買ったパンがあることを思い出した。確かにこの辺りに置いていたような気がする。

俺は記憶を辿り自分が置いたであろう場所を探した。もちろん部屋が真っ暗なので手探りで探す。意外とあっさりと見つかった。カレーパンだ。

俺はそのカレーパンの袋を開け、パソコンチェアに座る。これは俺の拘りのもの。10万以上もする椅子だ。座り心地の良さは格別で、メッシュ素材で背中も蒸れない。

再度、「オトノナイセカイ」について検索を始めようとマウスを握る。

パンを口に入れ、噛んだその瞬間。。。妙だな。カレーの味がない。オマケになんだかぬるぬるした感覚がある。辛うじて香辛料を感じることが出来る程度だ。

カレーの味ってこんななんだっけ？と思えるような変な感覚。まさか。。。嫌な予感が頭をよぎる。これは腐っている？

そう思った瞬間吐き気が襲ってきた。カレーパンを握りしめ、口の中にカレーパンを残したまま、大急ぎで部屋を出て一階のトイレへ向かった。

なんとか事なきを得たが、流石に気分が悪くなつた。何故か手に握つたままのカレーパンを見るとさらに気分が悪くなる。何故か糸を引いた中身。そしてよく見るとカビらしきものまである。最悪だ。腐つてやがる。とことんついてない。

俺はそのまま台所へ向かつた。カレーパンを生<sup>ハ</sup>ミ用の「<sup>ハ</sup>ミ箱に捨てる。食卓テーブルを見ると案の定メシは置いてあつた。昨日の晩飯なのか今日の朝飯なのか、それとも昼飯なのか。

もう昼前だから当然のように親父もお袋も仕事に出かけていい。気分は悪いが腹は減つていて、仕方なしに置いてあるメシを食べるにした。

食事を終えた俺は再度「オトノナイセカイ」の検索を再開した。いろいろなパターンを考え、検索してみる。「オトノナイセカイ」「音の無い世界」「オト ナイ セカイ」「音 無 世界」。

各検索結果を全ページ隈無く見ていく。やはり大した記述を見つけることは出来ない。検索サイトを変えてみても結果は対して変わらない。

無駄に時間は過ぎていいくが、俺に取つて時間は大した問題ではない。

少し方向性を変えてみるかと、考えてみる。「音無」これでやつてみるとどうだらうか。見当違いかも知れないが足踏みしていくも仕方ないだらう。

検索の結果引つかかつたのは「音無川」「音無の里」「音無の滝」だつた。どれも何か神秘的なものを感じる響きだ。

音無川は和歌山県本宮町を流れる川だそうだが、全くと言つてもいいほど滝とはほど遠いような気がした。里や滝にしても音無川と関連あるだけのようではやり繋がるものではないようだ。

こうなつたら「滝」で検索して徹底的に見ていくしか無いのか

も知れない。虱潰し。<sup>しらちぶ</sup> もはやコレしかない。これは想像を絶する作業になりそうであることは明白であった。

そして探し始めて5時間。ついに見つけた。

#### 『オトノナイセカイの噂』

それはとある掲示板に書かれた書き込み。

そこは様々な「噂」を書き込み合つ掲示板のようだ。『噂サイト』でもいうのだろうか？ そこにたつた一つだけ『オトノナイセカイ』の記述があった。

黒髪の女が夢に現れたら最後。

全部白くなる。

そしてオトノナイセカイに堕とされる。

ちくしょ'う。

メールの返信も無いばかりか電話にも出やがれねえ。どうなつてやがる。自分から「会いたい」つてメールしてきたクセに……。俺をバカにしてるのか？

すでに日付は変わらうとしている。いつまで経つても連絡はない。いい加減に俺を振り回すな、今日はパチンコで散々な日にあって俺は気分が悪いんだ。

フミヤは何度もナナに電話するがいつまで経っても出ない。「何かあったのか？」と不安も過ぎるが、怒りが先に込み上げその可能性を切り捨ててしまう。

今日といつ日はおかしなことばかりだ。今朝辺りからおかしい気がする。一日を思い出そうとすると「ジジジジ」と一瞬目の前が白くなつてノイズのようなものを感じる。頭痛まではやがる。どうせ持病の偏頭痛だらう。

どうもあの話を聞いてから様子が変だ。あのムカツク野郎のせいか？ って、んなわけないだらうけどな。

アイツの話はおかしなものだつた。ニヤニヤ笑い出したかと思うと妙なことを言いやがつた。

「こんな噂聞いたことあるか？」

噂なんて興味は無かつたが、俺は興味のあるフリをして聞いてやつた。

その女は突然、夢の中に現れるといつ。目を絶対に合わせてはいけない。

合わせたら最後、オトノナイセカイに連れられる。

どつかで聞いたような都市伝説まがいのものだった。所詮は噂。だから何だ？

そんな顔を俺はしてたのかも知れない。その男は尚も笑いながら言った。

「こないだ死んだ社員のヤツも『噂』を聞いて死んだって話らしいぜ」

男はしきりに頭を搔きながら笑っていた。

どうもムカツク野郎だ。昨夜はこんな感じじゃなかつた気がするんだが。何にしてもそんな噂なんてどうでもいい。そもそも「噂」を聞いて死ぬんなら、オマエも死ぬんじゃないのか？

「アンタ、近いうちに『オトノナイセカイ』にいっちゃうかもよ。なーんてな」

俺が思ったことが通じたのかは分からぬが、男はそれだけ言うと去つていった。

結局その男とはその日、姿を見せなかつた。アイツは一体何をしにきたのだろう。

そのことが気になつた、という訳ではないが、パチンコは大負けした。散々だ。持ち金はすっかりなくなつてしまつた。

そして俺は何もすることがなくなり、結局このゴミ溜めのよくな家に戻つてきた。もちろん家に帰つたところですることもない。もはや虫の息のようなテレビを付けて暇を潰した。

晩飯すら食つ金が無い。またナナから金貰うかと電話をかけるが出ない。そう言えば昼に一応メールしたが返信はまだ無かつた。

ナナはいわゆる「お嬢様」だ。親が何かでかい会社の社長だといつ話は聞いてる。たまたまナンパして付いて来たのがナナだった。その場のノリでホテルに入った。

俺みたいなナンパ野郎についてくるヤツはそのほとんどがいわ

ゆる軽い女だ。金持ちのお嬢様つてのもあつたが、波長があつたといつのかよく分からんが、すぐに付き合うことになった。

ナナは俺が何も言わないので金をよくくれた。多分俺みたいなヤツに自分のステータスを見せつけたかつただけなんだろう。

俺はアイツに快樂を。アイツは俺に金を。それだけで良かつたのかも知れない。

『ナナだよ ナナだよ』

携帯が鳴つた。やつとかけて来やがつたか。

この着信音はナナが自分で録音したものを俺の携帯に勝手に設定しやがつたものだ。付き合つた当初は恥ずかしさやら嬉しさはあつたような気がするが、今はウザくて仕方が無い。しかし設定をナナが勝手にパスワードでロックしたものだから俺には解除できな

い。

「ナナ！ おせえーよー！」

電話を取ると同時に罵声の如くナナに怒鳴る。そしてさりげなく怒りがフミヤを支配する。しかしナナはそれに応えようとせず無言だ。その無言はフミヤにとって火に油を注ぐ行為でしかなかつた。

「シカトしてんじゃねーよ」

低い声で言う。それはまるで相手を威嚇するかのようだ。少し間を置き、その声はした。

「キミが”フミヤ”だな？」

男の声だ。年の頃は50歳くらいだろうか。間違い電話か？いや、そんなはずはない。あの着信音は確かにナナだ。ナナ以外にあり得ない。この男は誰だ？

なんとなく威厳を持つ、そんな雰囲気の声だ。しかしながらく見下したかのようなその口調とその声に俺は少し焦りを感じた。

少しの間を置き、警戒しながらも「誰だ？」と応えた。少しの沈黙が気を焦らせる。心臓の鼓動が早くなるのが分かる。

「私は菜々子の父親だ」

思いがけないその声の主に俺は絶句した。

何を言つていいか分からぬ。以前に一度だけ会つたことがあ  
る。しかし俺の姿を見るや否や「キミの存在は認められるものでは  
ない。去れ」と言われた。見た目だけの判断。あの時の屈辱は  
忘れられない。あのクソ野郎……何様のつもりをしてやるつ……。

俺は電話を切ろうとした。いや、切りたかった。逃げたかった  
のかも知れない。しかしその電話の向こうから伝わってくる緊迫な  
空氣。それがナナの親父から発されるものなのかは分からぬが、  
それが俺に電話を切る勇気を与えてくれない。

俺は声を出すことすら出来なかつた。

「菜々子が死んだ」

その男はそう言つた。俺はその内容に耳を疑つた。

「コイツ何を言つてやがる……。一瞬心臓が止まるかのような衝  
撃が襲つてきた。重い……。内臓の全てが逆流してきそうな妙な感  
覚。背筋に痛みが走る。何故か息苦しくなつてくる。

そしてその男は無限とも思える間を空けた。恐らうだが実際に  
は1分も無かつたのだろう。しかし俺にはそれが数時間のようにも  
思えた。

「今日の昼のことだ。通夜で今までばたばたしてて報告が遅れた  
ことは詫びよう。すまない。仮にも我が娘と『付き合つていた』よ  
うだからな。ただ一言言つておく。私はキミを認めていた訳ではな  
い。娘の携帯を見て最後に連絡をしていたのがキミだつたから、慈  
悲の思いで報告したまでだ。明日は朝から葬儀だが来て貰わなくて  
結構だ。娘の墓前にも現れないで欲しい。貴様にこれ以上娘を冒涜  
されたくない。一度と姿を見せるな。以上だ」

そのナナの親父と思われる男は言つだけ言つて一方的に切つた。

俺は何も言つことが出来なかつた。ナナが死んだ? 嘘だろ?

突然の電話。中年の男。それに加えての悲報で俺は思考が停止す

るかのようだつた。

何も考えられない。

目の前が真っ白になる。視界がゆがむ。俺はゴミ溜めのような自分の狭い部屋で立ち尽くし泣いていた。携帯を持つ力さえなくなっていた。

気がつけば朝田が昇っていた。

まさかヤマザキの口から「噂」という言葉が出てくるとは思わなかつた。彼はもつと現実的で目の前のことしか信じない、自分の見た真実以外は口にしなさそなタイプの人間だったからだ。

ヤマザキと知り合つてまだ半年足らずだが、それくらい分かる。

「なんすかそれ？」

俺は当然知らない。そんな噂より“それを聞くヤマザキ”に興味を持った。

ヤマザキとの出会いはこのBARだつた。

上京して間もない頃、俺は特に宛ても無くブラブラと街を歩いていた。数日間、東京のありとあらゆるBARを渡り歩いた。たまたま俺が歩いたこの渋谷で、まさかこんなBARがあるとは思わなかつた。

たまたま入つた脇道。そこにこの「Lanthane」はあつた。

薄い照明で照らされた看板に「Lanthane」の文字。俺はそれだけでその店に惹かれた。今思えば引き寄せられるかのようでもあつた。

店に入るとそのセンスの良い店に俺は心を奪られた。バーテンダーとしての本能なのだろうか、「このカウンターでシェーカーを振りたい」。そんな思いが爆発する。こんなことは初めてだつた。

カウンターに立つのは身なりの良さそうな初老と言つても差し支えのなさそうな男だつた。

白髪交じりの少し薄くなつた髪は長く伸ばされ、綺麗に後ろで結われている。そしてほほ真っ白と言つても差し支えのない髪は鼻の下で上品さを伺わせる。丸めがねをかけ、その出で立ちはあるで

昭和初期の頃の軍人や貴族を連想させるかのようでもあった。しかしその顔つきや雰囲気からは人を安心させるようなオーラにも似たものを持っていた。

このバーテンダーに会うだけでもこの店に来たかいがあるなど俺は思った。こんなバーテンダーに俺もなりたい、そう純粋に思えた。

そのバーテンダーから注がれたビールを口に飲んでいたのがヤマザキだった。

彼は今日と同じくカウンターの端に座つて、独り飲んでいた。ヤマザキから一つ空けた席に座つた俺は「あなたの思いをくれませんか?」とバーテンダーに注文した。今思えばなんであんなに「クサイ」言葉が出たのだろうか。今思い出すと赤面してしまう。しかしあの時、あのバーテンダーは「思い」を作つてくれた。その味に俺は泣いた。

決してこのバーテンダーは「凄腕」という訳ではなかつた。

テクニック、スキルその全ては自慢では無いが、俺の方が上だつた。しかし彼は無言で俺にこう言つてくるかのようだつた。

「バーテンダーに一番必要なこと。それはお客様との時間を楽しめるかどうか。お客様の心境をどれだけ察するかです」

それが彼の言葉かはどうか分からない。だが彼の作った力クテルはそのことを俺に教えてくれた。最高の一時だつた。

変わつた香りの煙草を吸うヤマザキはそのやりとりを静観していた。嘲笑う訳でもなく、俺の方を見て微笑んだヤマザキは「最高の客」に見えた。

ヤマザキはその出で立ちからは何を生業としているのか想像もつかない。

一見普通のシャツにダークグレーのジャケット、そして少し色の濃いデニムのジーンズに黒のラインが入つたスニーカー。それらが彼の為に存在しているかのようで、「これが格好良いということなのかと俺は思った。

何の香りだろう？

そう思つた俺は気づけばヤマザキに声をかけていた。

「良い香りですね。何の煙草ですか？ 輸入物ですか？」

との俺の問いかけにヤマザキは深く吸つたその煙を天井に吐いて言う。

「輸入物つてところだけが正解だな

と口を開いた。

そしてビールに口をつけ、唇に泡を付けたまま言った。

「これはキュー・バ・モ・の・葉・巻・だ・よ・」

今日もヤマザキはその時の格好と同じく、ビールを飲み、キュー・バ・モ・の・葉・巻・を吸つている。あの時と違うのは俺がこの店のバーテンダーだということだけだつた。

「覚えてるだろ。前のバーテンダーの富下さんを」

ヤマザキはいつになく険しい顔をしていた。

「ええ、もちろんですよ。あの方にもお世話になりました。俺が今ここでバーテン出来るのだって、富下さんのお陰でもありますしね。俺にとって山崎さんも富下さんも俺の恩人ですよ」

俺は富下さんの好きだつたジャズのCDを棚から探しながら答えた。

「今、この店にいるのは俺たち一人だが、あくまでこれは俺の独り言だ。気にしないでくれ。相づちもいらない。オマエはオマエの仕事をすればいい」

ヤマザキはそういうとビールの一・杯目のビールを要求した。俺は新しいグラスにビールを注いだ。

「実は富下さんは先日起こつた殺人事件の犯人、富下真人の父親なんだ」

遠い目をするヤマザキ。俺はその衝撃の事実を黙つて聞いた。

もちろん驚愕の事実ではあるが、俺の手はCDを探すのをやめるこ

ではない。ここは黙つて聞くべきなんだ。

「息子さんは『デザイナー』だった。交際相手を刺殺。ちょうど事件はヨネがこの街にやってきた頃だった。息子のやつた過ちに責任を感じた富下さんは隠居した。今は故郷に帰つてゐるやつだ。どこかまでは分からんが」

葉巻を消したヤマザキは懐から煙草を取り出し、煙草に火をつけた。メンソール系の煙草のよつだ。

「俺だつて富下さんはそんなに親交が深かつた訳じゃない。俺がこの店の『デザイン』をしてからの付き合いだ。以来、俺は寄、富下さんはバー『テン』。それが全てだつた。毎日のよつに来てたよ。この店に。俺の最高の日々だ」

灰皿に灰を落としながら煙草の火に田をやり、店内を見渡すヤマザキはどこか寂しげだつた。

俺はようやく見つけたそのCDをかけた。静かにピアノの音色が店内を流れ始めた。

「世間では『富下事件』とまで言つた。メディアは面白おかしく伝えた。もちろん息子さんがやつたことは許されるべきことではない。だがそれは法が裁くことだ。メディアが裁くことではない。そんな世間の目が耐えられなかつたんだろうな。奇しくもあの事件から3ヶ月経つたクリスマスの日。あの日。富下さんは引退を決めたんだ」

「そう、俺がこの店にはじめて来た日だ。

「憎かつたよ。世間やメディアが。息子さんが！ そして富下さんもな。だが、それは間違つていた。あの人は逃げた訳じやなかつた。この店を守りたかったんだ。引退。それがあの人の最後の仕事にかける想いだつたんだ」

ヤマザキに、いや、富下さんに「誇りを持て。自信を持て。何よりも仕事を『好き』でいる」そう言われた気がした。

俺はバーテンダーを選んだ生き方に誇りを持とつと思つた。

そしてヤマザキは「おつと、独り言はしないで」と呟いた。そして残されたビールを一気に飲み干した。

そのジャズは何かもの悲しげだった。まるでヤマザキの心を、富下さんの心を現しているかのようだ。再度俺はヤマザキにビールを入れた。そして「俺も飲ませて下さ」、せつまつてグラスにグラスを注いだ。

そしてヤマザキは「噂」について淡々と語り出した。

「あの少し前のことだ。『噂』を聞いたのは

ヒサが聞いたところ、「ウワサ」。なにやら不気味で得体が知れない気がする。

俺たちは本当にこの噂に関わってしまったといつか?

あの時感じた「靈的」な違和感はこの「黒髪の長い女」なのだろうか。もしそうであれば俺たちも「オトノナイセカイ」に連れて行かれるのだろうか。

しかし不思議だ。俺も弥生子もこの得体の知れない「噂」のせいで恐怖に支配されようとしている。しかしこのユースケの余裕のある態度は一体どういうことなのだろう。

俺はしばらく考えた後、そのことについて問いただそうとした。しかし先に口を開いたのは再びユースケだった。

「なあ、トウヤ。この噂話だが、何かに気づかないか?」

どういうことだ?

ユースケは何が言いたいのだろう。その「何か」に俺は気づいていなかつた。

「いや、分からぬ

俺はそう答えた。

「胡散臭い。そう思わないか?」

「つさんぐさい?」

俺はもちろんのこと、弥生子も訳が分からぬ。

「まあ、噂なんて全部胡散臭いわけだが……」

やれやれとユースケは首をかしげながら、なんで気づかないかなというような表情で言った。しかし俺は何を言われているのかマイチ、ピンと来ない。

「すまん。あまりにもいろいろなことが分かつてきて頭が回つてないのかも知れない……」

そう言ってから自分が言い訳していることに気づいた。別にそ

んなこという必要なんて無かつたのかも知れない。というよりも何か馬鹿にされたような、そんな風に思えたのかも知れない。

「これはヒサから聞いた『噂』を俺がパソコンで打つてプリントしたものなんだが……」

そういうとコースケは紙を取り出した。それはA4サイズのコピー用紙のようで、そこには「ウワサ」が書かれていた。

「何点か『胡散臭さ』があるんだが……。まずは『黒髪の長い女』だな」

「黒髪の長い女」の箇所をなぞりながらコースケは言つた。

言われて気づいた。

文字で「ウワサ」を見ると確かに違和感がある。コースケは俺の反応に「気づいたな」と目を光らした。弥生子もどうやら気づいたようだ。

「なるほどな。最初は気にもしなかったが……。『髪が長い』のか、『女が長い』のか？ つてことだよな？ 聞くより見た方がよく分かるな」

俺はコースケに確認してみる。

「その通り。おかしな表現だよな？」

「確かに変！ 『長い女』とかちょーウケるんですけど」

弥生子に久々に笑顔が戻つた気がした。

確かにこの「ウワサ」はよく考えれば考えるほどおかしいもの気がしてきた。

「普通なら『長い黒髪の女』と表現すると思うんだよ。ヤヒちゃんがいうように『長い女』という表現が仮に正しいとしたら、それはもうギヤグでしかないだろ？」

「もつともだと思つ。」

「おかしいのはこれだけじゃない。もう一度よく見てくれ。この噂には『都市伝説』が含まれているんだ。つまり噂の中に噂がある」

コースケは俺と弥生子にそう促すと、コーヒーに口を付けた。

俺は煙草に火を付け、もう一度じっくり見てみる。弥生子は携

帯を取り出しメモを取り始めたようだ。俺もそれに倣つて携帯のメモ帳に「ウワサ」を書き込んだ。

注意しながら読み直すがコースケの「」との意味はよく分からなかつた。

「すまん。全体的に違和感は感じるけど分かんないよ」

俺は正直に伝えた。

「まあ、普通なら気づきにくいかもな。『血液型占い』。これが『都市伝説』だ」

これには流石にずっと黙つていた弥生子も反応した。弥生子は血液型占いが好きでよくその手の本を読んだりしていたからだ。

「相当浸透しちゃつてるし、生活の一部として溶け込んでるから気づかないかも知れんが、『血液型占い』も『都市伝説』みたいなもんなんだよ。この占いで性格判断をやつてるのは日本と韓国と台湾だけなんだ。しかもこれは日本が発祥なんだぜ？」とある学者が統計学で出しただけのことで、それを本にしたらたちまちヒットして、気づけば根付いただけなんだ。根本的に科学的根拠は全くないんだ」「えー。でもケツコー当たるよー」

コースケの話に批判するように弥生子は言つた。

確かに当たることもあるけど、コースケの言つように統計学を基礎としているなら確かに頷ける話かも知れないだ。オマケにあの手のものは「どっちともどれる回答」であることも多い。「当たつてる」と思えば当たつてるし、「外れてる」と思えば外れてる。俺はそれを理解すると弥生子に簡単に説明した。

あまり納得出来なかつたようだが、とりあえず「この場はそういうことにして」と軽く流させた。

その間、コースケはドリンクバーで再度コーヒーバーを入れに行つた。

ふと携帯を見ると母さんからメールが来ていた。晩飯が出来てから早く帰つてこいとの内容だった。俺は弥生子と一緒にコースケと会つていると伝え、もうすぐしたら帰ると報告した。

そしてコースケが戻つてくると、今入れてきたばかりの「コーヒー」を少し口を付けたところで再び語り始めた。

「今言つたよ、この噂だが……」

と前置きを置いたコースケは俺と弥生子を交互に見て言つ。横に座る弥生子は軽く頷く。

「これは創作されたものである可能性が高い。だが、すでに俺たちは一箇所から情報を得た。これが少し気になるところだ。それと気になるのは『夢』と『女』だと思う。それに加えてやはり『オトノナイセカイ』の正体だな。まだ情報が足りない。ヒサにしても噂を調べて欲しい理由について一切口にしないんだ。まだ何かある気はする。どうもアヤちゃんに手がかりがありそうだ。おまえらはそつちを探つてくれないか？ 俺は別の線から探つてみる」

コースケの言つことはもつともだと思つ。俺と弥生子はアヤちゃんを探つてみるべきだ。とても弥生子一人で関わるべき問題じやんを思つた。

とにかくもう遅い時間だ。時計の針は気づけば9時半を差していふ。もう帰るべきだ。

「よし、じゃあ俺と弥生子でアヤちゃんに会つてみる。会えば何か分かるだろ？」

俺は言つた。弥生子もそれに賛同した。

「ああ、やつしてくれ。あ、そうだ、アヤちゃん。悪いナビアヤちゃんからのメールを全部転送してくれないかな？ ちょっと気になることがあるんだ」

コースケはそう言い、メールアドレスを弥生子に教えた。弥生子もそれに承諾し、アヤのメールを転送した。

「よし。もし何か分かつたら連絡する」

そして俺と弥生子はコースケに別れを告げた。

店から出ると雨が降り出していた。降り始めたばかりのせいか熱気で湿度がかなり高い。ジッとしているだけで汗が滲んでくる。

ジジジ……

一瞬、ノイズのような眩暈がする。体が畏怖するかのよう、ゾクッと背筋が凍るような視線を感じた。しかし辺りを見回しても、弥生子以外誰もいない。弥生子は一瞬不思議そうな目でこっちを見たが、「なんでもない。帰るわ」と俺は言い、車に乗り込んだ。

結局、この日はそれ以上の進展はなかつた。

「ちょっと来るの早かつたかな……」

すでに深夜0時を過ぎ、日付は10日に変わっていた。トウヤと待ち合わせをしていたコースケは一足早くファミレスに訪ねていた。昨日、いやもう日付が変わったから正確には一昨日だが、三人で待ち合わせたファミレスだ。まさか連日で来ることになるとはな、と苦笑する。

明日、と言っても今日だが、日曜のためだろうか、こんな夜中だというのにも関わらず客はなかなか多い。若い客が多いせいか騒がしい。

前回と同じくドリンクバーを頼み、コーヒーを入れる。相変わらず大して皿くない。

持ってきたノートパソコンをカバンから取り出し起動する。そして無線の電波を受信出来るかを確認する。問題無くインターネットは出来るようだ。最近は何処でも無料で無線LAN使えるから便利なものだ。

簡単にメールチェックを行い、特に大したメールも来ていないことを確認すると、『オトノナイセカイ』と名付けたテキストファイルを開く。

これは「ヒサから聞いた噂」とヤエに送られてきた「アヤのメール」についてまとめたものだ。実際は単に忘れないようにメモしている程度のものだ。

一時間ほど前にトウヤから受信したメールには「メールで気づいたことがある」と書いてあった。今日ここへ来たのももちろんその件のためだ。

そんな報告もあって、コースケは何度も「アヤのメール」に目を通すが、その「トウヤの気づいたこと」が何なのか分からぬ。

そんな時、携帯に一件のメールが入った。トウヤか？と思つ

たがヤエだった。

『アニキにもメール打つたんだけど、なんか胸騒ぎがする』

そう言えばトウヤとヤエには靈感があると言っていたことを思い出した。案外その「胸騒ぎ」というものも無視出来ないかも知れない。わざわざ俺にまで送つてくることを考えるとなおさらだと考え、

『わかった。ヤエちゃんが言つなら何かあるのかも知れない。俺も注意するよ』

とユースケは返信をしておいた。

すると少しの間も置かずに新着のメールを受信する。

やけに返信が早いなと思い、確認をするがそれはヤエからのメールではなかつた。もちろんそれはトウヤでもなれば友達や知人でもないし家族でもなかつた。

そのメールのアドレスは全く見覚えのないものだつた。  
ランダムな文字列のようにも見える。@マーク以下のドメインにしても全く知らないものだ。件名は何も書かれていない。どうせろくでもないメールなのだろうと不振に思いながらもそのメールを開く。

『このメールを見たら30分以内に友達や知り合いに転送しましょう 最低でも5人くらいはヨロエ? 転送しなきゃどうなるかって? アハハ 殺しに行っちゃいますよお? 紅い鞠が転がりました。次は白くなっちゃう! ばいばい』

ユースケの顔が一瞬強張る。しかし内容はどう見てもチエーンメールだつた。

チエーンメールとは連鎖的に不特定多数への配布をするよう求めの手紙、所謂『不幸の手紙』というヤツが発祥だ。

もう10年も前だろうか、当時はまだインターネットが今ほど

浸透しておらず、コースケもまた中学生でパソコンに触れ始めたばかりのことだった。当時のコースケも親にせがんでパソコンを買って貰い、インターネットに繋げた。当時はまだISDNが普及し始めていた頃のことだ。まだ自分の周りでもインターネットをしている者は少なく、学校の友達には「インターネットってなに?」と聞かれるような、そんな時代だった。

その頃、数少ないがコースケにはメールを交換していた人がいた。

その彼（彼女?）とはネット上のメール友募集サイトで知り合った。毎日メール交換をしていたが何度もその人からチーンメールを貰つたことがあった。「だるまの話」「サザエさんの最終回」「ドラえもんの最終回」「某番組の企画」「お金持ちになる方法を教えます」などだった。大して記憶に残っていないが、他にも様々なものがあった。今思えばどれも「都市伝説」と呼ばれるものばかりだったかも知れない。当時のコースケにしてみれば新鮮でその未知の話に恐怖したものだ。

今では「バトン」などと言われるものの方が多くなり、その数は無限に増えている。その特性はチーンメールとは違つてはいるが、特にSNSソーシャル・ネットワーク・サービスなどに多いようだ。

半ば強制的で押しつけがましい点が類似している。チーンメールにしてもバトンにしても元は「不幸の手紙」が源流であることは違いない。

今時チーンメールかよ。流行んねーよ、とコースケは苦笑する。

軽いノリでりながらもその内容は不謹慎だ。「『殺す』だと? はいはいワロスワロス。やれるもんならやつてくださいwww」つて感じだな。当然無視をする。

しばらくすると再び携帯が鳴る。今度はアヤからのメールだ。『うん。そーして。カンケーないだろ? けど、なんか変なチーンメールも来るし心配』

どうやらアヤにもあのチヨーンメールが届いたようだ。

ヤエのメールを見たユースケは苦笑する。実際に会つてるとときは敬語なのにはメールだと違うんだなと思ったからだ。見た日は今時の女子高生だが、ヤエは意外としつかりしているのだろう。

しかし同じような時間に来るのも少し妙だなとも思つたが、その多くのチヨーンメールは最近ではいわゆる「出会い系」の宣伝メールと同じようなもので、いわゆる「業者」と称される者が発信していることが多い。そう言つた業者は専用のプログラムを用い、予め購入した不特定多数のメールアドレスに一斉送信するようだ。故に同じような時間に届いていてもなんら不思議ではない。

『ヤエちゃんにも届いたのか。バカっぽいけど、なんか不気味だよな。間違つても転送すんなよ』 今、トウヤとあのファミレスで待ち合わせてるんだ。何か気づいたことがあるらしい』

ユースケはそう返信するとインターネットで念のために届いたばかりのチヨーンメールを検索にかける。しかしその検索結果は皆無であつた。まだ新しいチヨーンメールなのだろうか。

返信して間もなく、ヤエから

『え？ ユースケさんにも届いたん？ まつじい？ ウザくね？』  
分かつてるよ 転送なんてする訳ないじゃん！ ( 、 、 \* )  
アハハ アニキが何かに気づいたの？ また教えてね 』

とメールが届く。

その後、ユースケは「オトノナイセカイ」について検索してみることにした。ヒサから噂を聞いたときに検索をかけて以来だ。あの時は全く検索に引っかからなかつた。しかしあれから時が流れたせいか、「オトノナイセカイ」についていくつかの結果を得ることが出来た。

なんと、ヒサから聞いた噂の他にもう一つ別の「噂」が出てきたのだ。大まかな内容にその違いは無いが、ヒサから聞いた噂と比べると随分簡略されたかのような内容だつた。「夢」「女」これらに変化はない。ただ「長い」という言葉は消えている。

気になる点は一つ。「白くなる」という言葉が出てきているのだ。

「ん？ さっきのチーンメールでも『白い』と表現があった。まさか関係が？」

思わず口に出してしまった。

「どうも『オトノナイセカイ』を知つてから、少しずつ自分の周りに変化してきたように思つてならない。たかが噂、都市伝説の出来損ないみたいなモノになんて振り回されなくちゃならないんだ。しかし何かとんでもないことに巻き込まれ始めているのではないかと一瞬脳裏に過ぎる。得体の知れない何かが確実に近づいているように思えるのだ。俺たちは触れてはならないモノに触れようとしているのではないだろうか」。コースケの心に不安は募る。

噂の一文をコピー＆ペーストで『オトノナイセカイ』のファイルに書き出す。そして念のため、チーンメールを携帯からパソコンに転送し、ファイルに書き出す。簡単なメモ書きもしておく。

何度も見ても何も分からぬ。トウヤは何に「気づいた」のだろう。

### Tips.1 「コースケメモ」

オトノナイセカイについてのメモ

#### 【ヒサから聞いた噂】

夢の中で黒髪の長い女が誘つ。その女に狙われると連れられな

い。

女は言つ、「あなたの血液型を教えて」と。そして答えるとそ

の血液型が何であれ、「あなたとは相性が合わない」と言い、「オトノナイセカイ」に連れて行かれる。

### 【ネットで見つけた噂】

黒髪の女が夢に現れたら最後。全部白くなる。そしてオトノナイセカイに堕とされる。

### 【アヤメール】 不要と思われる箇所は削除済み

『8／8（金）00：30：意iフェ音ふいfえmおいrhnfa  
mれい1.jpgれおj...m1.k...』  
『8／8（金）00：38：じょm1.jeを@p、ヤHしゃかい  
ひおえr0j...頼れおjロ6.jを...ああ』  
『8／8（金）00：50：k』sふえm1.kf...@.uげ1@  
p1k@p...pk@a...akbge...p...t...m...r...j  
ほ...j...m...1...t4940hkt...k@助けて』

### 【チHーンメール】

このメールを見たら30分以内に友達や知り合いに転送しまし  
ょう 最低でも5人くらいはヨロ...え？ 転送しなきやどうな  
るかって？ アハハ 殺しに行っちゃいますよお？ 紅い鞠が転  
がりました。次は白くなっちゃう！ ばいばい

- ・ヒサから聞いた噂とネットで見つけた噂の違いが気になる。「長い」といってなんだ？
- ・ネットで見つけた噂とチHーンメールに共通する「白い」という言葉が気になる。
- ・アヤメールについてトウヤは気づいたことがあるらしいが？

111まで8月10日現在の情報。時間は0時半。トウヤなかなか

か来ねえな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3259f/>

---

音の無い世界～オトノナイセカイ～

2010年10月26日04時52分発行